



十六年十月
 廿二日
 廿三日
 丙戌
 农事記

早稲田大学図書館
 文書 27
 B 37
 3



東京日々新聞 十月十三日

外信

○佛將ブーエー氏報告 (十月十日刊行横濱エコミュニヤ
ホシ) 東京征討都督ブーエーハ佛國海軍卿ニ當テ左
報告ヲ為シタリ

八月十五日予ハ兵士凡千八百人及大砲十五門ヲ率ヒテ
山西ニ向ヒタリ左軍ノ將レライオンハ精銳ノ銃器
ヲ以テ装ヘル敵兵四千人ノ固守セル障壁ヲ攻撃シ
終日奮戦薄暮ニ至リテ引上ケ中軍ノ將コロシナハ
ブーホイノ塁ヲ攻略シ敵ノ中軍ト相對シ茲ニ一宿ヲナ
シ翌夕ニ至リテ引上ゲタリ右軍ノ將ヒシヨールハ砲艇ノ

防衛ヲ得テ河川ニ沿ヒテ進ミ敵兵ノ占守セル一寺
 院ヲ攻略シ又水軍トカラ合セテ敵ノ砲隊ヲ砲撃シ
 タリ然レトモ河川堤坊ノ崩壊シタル遭ヒ止ムラ得ズ其
 兵ノ一部ヲ砲艦ニ移シタリ予ハ右ノ寺院ヲ保守シテ
 砲艦ハ其傍ニ碇泊セリ
 此進撃ノ後ニ敵兵ハ其守ヲ棄テ山西ニ退キタリ而
 シテ我軍ノ此攻戦ニ殞命シタル者ハ士官二人雜兵十
 人員傷シタルモノハ士官二人雜兵二十七人ナリ敵兵ノ
 殞命シタル者ハ二百人ニシテ其負傷シタル者ハ無慮
 千人ナルベシ

東京日々新聞 十月十三日 外信内

○上海通信 (前號ノ續)

此敗報ノ河内ニ達スルヤ

即時兵ヲ出シ之ヲ援セシメタルニ黑旗ハ更ニ動カズ陣ヲ嚴
 ニシテ之ヲ待テ暫時ニシテ佛軍砲聲ノ稍々静カナルヤ黑
 旗兵ニ又々烈シク出来リ各兵手ニ火藥ヲ幾包モ携ヘ
 先ツ之ヲ抛テ聲ヲ発シ同時ニカヲ揮ヒ殺入セシ佛兵ノ
 援軍モ奔潰シ艦ニ至ラント岸ニ至リタルニ敵兵モ餘リ烈シ
 ク追撃ヲナサレ様ナレバ先ツ安心ヲナスヤ又々河岸ノ草
 際ヨリ聲ヲアゲ進殺ヲナシ折柄此節河水漲リ艦ニ達スル
 一能ハガレハ全隊沈没ヲナシ僅ニ士官二名従者一名ノミ河中
 ニ飛入り水ヲ泗リ艦ニ走りタル一ヲ得タリト佛軍ノ死者ハ
 右ノ援軍ハ残ラズ黃旗ハ百七十八人安南募兵ハ百四十五名ノ

多キニ及ヒタリト云フ黒旗ノ伏兵ハ何レモ片手ニ竹ヲ製セ
シ楯ヲモチ其長サハ身ト齊シク少シク凸ニテ外面ニ紙ヲ
帖シ之ニ漆ヲ塗リ内面ニ薄鐵ヲ覆ヒ敵ニ遇ハ先ツ此
楯ヲ以テ地ニ伏シ敵銃ノ甫メラ卒ルヲ待テ一時ニ奮起シ
腰ニ帯ヒタル火藥包ヲ抛テ乍ラ進撃シ敵ニ近キカラ揮ヒ
来レリト現在佛軍ニテハ此戦死者ヲ取片付テ白蘭ニ塵メ
更ニ砲臺一座ヲ要路ニ築キ二百名ヲ以テ之ヲ守リ傷者ヲ
河内ニ送り返セリ黒旗ニハ其後窮追ヲナサズ退キテ新地ヲ
守リシガ其後ノ通信ニハ此砲臺モ已ニ黒旗ニ奪ハレ次第ニ
全軍進ミ出テ別ニ安南兵五六千之ニ從ヒ北寧ヨリ進ミテ
黒旗ト共ニ犄角ノ勢ヒヲナシ河内ニ迫ラントヒシカバ佛軍ハ

大ニ恐レ急ニ小紅河ニ砲臺ヲ築キ之ヲ守リ晝夜巡哨シテ
守備ヲ嚴セルカ此節ハ黒旗ノ兵數ハ凡ソ一万數千モアリ
其陣勢銳甚ヲ極メタリト然ルニ如何ノ事ニヤ佛國ノ元師
波滑ニハ忽チ身ヲ起シ同地ヲ去ラレ聞ク處ニテハ既ニ香港
ニ至ラレ至急歸國セラルトノ事ナルカ或ル説ハ全權公使ト少々
論旨ノ合ハルコトアリ夫カ為メ内心ニ氣ヲ負ハレ斯ク軍ニ臨ミ
身ヲ退カレタルモノナリト此説ノ如ク黒旗ガ實ニ勝利ヲ得タル
トナレバ中々ノ御手際ナレヒ少々ハ旌節モ免レガルカ併シ先ヅ
勝利ハ取リタルニ相違ナカルベシ其後ハ如何ニヤ何卒全勝ヲ占
ムレバ宜シケレヒ此辺ハ少々受合兼タル事ト存セラル佛國ノ
徳公使ニ去九月十七日天津ニ着セラレタル由ナルカ昨今ノ説ハ

同氏モ免職トナリ不日新公使ノ本國ヨリ清國ニ向ヒ来ラル、
由ニ承ハル

時事新報 十月十三日

雑報

○清佛ノ談判 トリクラー公使ハ天津ニテ李中堂ト

時事新報 十月十八日

電報

十月三日龍動祭 佛京巴黎ニテハ現内閣交迭ノ機方ニ迫
リタリトノ噂頻リナリ内閣ハ當時其議論ヲ一モズ近報ニ據
レハ議院ノ再會ヲ俟チ居ル由ナリ

雜報

十月十八日

○清佛ノ關係 去ル十二日佛京巴里ヨリ東京ノ或ル筋ハ達
シタル電報ニ依レバ清佛兩國ノ談判ハ平和ノ境ヨリ遠サカ
リタルモノ、如シ左ニ其大意ヲ記ス

清佛兩國ノ談判ハ平和ニ落着スベキ見込大ニ減省シ

十月二十七日
法國國會集議
あり
昨ニテ多ク會議以
何百々々の用
十月二十七日
ナキ
ナキ

たり其原因ハ曾紀澤公使ヨリ北京政府ニ急報シ目
下佛國政府ノ地位ハ内外共ニ甚々困難ナリ十月廿二日
國會集合ノ時ニ至レハ現内閣ハ必ズ退職スベキノミナ
ラズ東京^{シキ}征討費ノタメニ一錢タリトモ投票スルコトナ
カルキ^{シキ}実況ナリト申送り名ヨリ清國政府ハ俄ニ佛
國ニ向テ一層大ナル要求ヲ申挂ケタルガタメナリ併シテ
此狀況トテモ兩三日ノ中ニ又何様ニ変化スルヤ測ラレズ
右電報到達ノ後未ダ何等ノ報知モ来ラザルヨシナレバ其以
来巴里ニテ兩國ノ談判振リモ十二日ノ終ノ狀況ニテ格別ノ変化
ナキトナラシカ

○安南ノ近狀 安南海防塔ノ近信ニ據ルニ佛將ハ黃旗兵ニ

向テ解隊ノ命ヲ傳ヘタルニ付キ其兵ノ大半ハジヨーヂノ管
理ニ後ヒ既ニ海防マデ帰着シタリ又佛國ノ援兵五百人ハ
先頃サイゴン號ニ乘組ミテ當地ニ到着シタルガ十月十五日迄ハ
尚三千人程来着スルトノナリ黑旗兵ハ河内ヲ立退キテ
桑台及其北部地方ニ屯營スル由又先日ノ戦争ニレイ、ウイン
グ、フック氏ハ創ヲ脚部ニ負ヒ其子ハ終ニ戦死シタリ然ルニフ
ック氏ノ行衛一時知レザリシヨリハーマン氏ハ今ヲ各所ニ傳ヘ
フック氏ノ所在ヲ尋子テ生ナガラ本陣ヘ護送シタルモノハ勿論
其死骸ヲ送り届タル人ニテモ二千弗ヲ給與スベシト申出セリ
去月廿八日ハ山賊退治ノタメ象山ヘ向テ當地ヨリ遠征兵ヲ
發シタリ此山賊ト申スハ其徒黨千餘人モアリテ近傍ノ村落ヲ

侵掠シ民害ヲナス一鮮少ナラズ此度ノ遠征ハ佛人ガ此賊ヲ討
平シテ民害ヲ除キントスル義舉ニ出テタレバ村落ノ人民ハ皆
額手シテ之ヲ欣戴スル由然ルニ是日大雨軍ヲ進ム能ハサルニ付キ
暫ク逗留シテ快晴ヲ待ツニ決シタリ安南政府ニテハ此度全權
使節ヲ発シ佛國使節ト共ニ既ニ平定ニ帰シタル疆土ヲ巡視セ
シムル由ニテ右使節ハ順化府ヨリ既ニ當地ヘ到着シタリ云々
○ウエル子ル氏 清國政府ニテハ嚮ニ普漏西ノ海軍卿タリシ水師
提督ウエル子ル氏ヲ聘シテ本國ノ海軍ヲ改革スル風説アル由ハ
豫テ記載セシガ尚聞ク所ニ依レバ右ハ全クノ虚聞ニテ只清國政
府ハ日耳曼キール府ノホワルド造船所ニ新タニ二軍艦ヲ注文シ
彼ノ提督ウエル子ル氏ハ同造船所ノ為ニ右ノ工事ヲ監督スル

一ヲ承諾シタ止迄ナリト云フ

官報 十月十八日

外報

○佛國將軍ノ告示(九月一日刊行佛國ルタン) 曩ニ佛國征東
 將軍ブーユー大率シテ紅河三角地ニ向ヒ將ニ戦ヲ用セントスル
 ヤ左ノ告示ヲ河内南定海防ノ城壁ニ掲ケ以テ住民ニ用戦
 ノ主意ヲ示シタリ 東京住民ニ告ク千八百七十四年三月十五日
 佛安兩國ノ間ニ結ビタル條約ハ實ニ佛國ヲシテ東京ノ治安ヲ
 保護スル為メ此地ニ相當ノ衛戍兵ヲ置クノ責任ヲ負ハシメ
 タリ

然ルニ住居ナク屬籍ナク唯脅奪剽掠ニ因リテ生活セル浮浪
 ノ徒久シク汝等住民ノ平安ヲ乱リ汝等ヲシテ此美國豊土ニ

天與ノ富源ヲ用クテ得ザラシメタリ

安南政府ハ紅河沿岸ニ於テ治安ヲ維持シ商業ヲ保護スルノ義務ヲ有スルガ故ニ佛國ハ該政府ノ其義務ヲ尽サンコトヲ欲シ敢テ之ニ干渉セス勉メテ平和ノ主義ヲ執ルコトヲ示セリ

今日ノ勢佛國ハ袖手傍觀スルコト能ハルニ至レリ何者佛國ノ人民ハ暴徒ノ為メニ脅及セラレ佛國ノ兵士ハ暴徒ノ為メニ誑殺セラレタリ故ニ今此地ニ戰爭ヲ用ク即暴徒ヲ征センガ為メナリ此等ハ暴徒ノ巢穴ヲ摧破スルニ非スハ已マザルベシ

數多ノ兵士ハ既ニ此地ニ到着セリ其餘ノ兵モ亦本國ヲ發シテ途ニ上リタル由ナレバ日ナラスニテ此地ニ來ルナラン汝等其糧食ヲ給シ道路ヲ教ヘ以テ之カ助力ヲ為セヨ汝等此兵士ニ因

リテ損害ノ賠償ヲ得ルナラン

佛國ノ旌旗ハ正義慈仁自由ノ表章ナリ汝等宜シク此ノ旌旗ノ陰ニ自キテ安寧ト保庇トラ求ムベシ盛大ナル國民ハ信義ニ依リテ汝等ヲ稱呼セリ汝等宜シク此稱呼ニ應スベシ今日ハ是汝等新ニ幸運ヲ用クノ秋ナリ

新聞 海外電報 十月八日

車被 失り 時り、報

九月三日英公使 使に於て在 法 困り、閣議り

十月三日ロンドン電 俄国内閣甚く危迫、有極ニテ、内閣中、事變
ヲ生ラタリ、巴黎ニテ、專ラ風説セリ
其後、報知、日レ、内閣、只議院ノ開會ヲ待テ、
ワ

外國新聞、日、今回、我カ、外務卿、清國公使曾侯爵ノ閣、開コレ
商議、基礎、向テ、フリー、エ、以、北京、旅、取、結、ト、モ、條約、比、シ、ハ、弗
ノ箱、一、張、ヲ、譲、リ、シ、似、タリ、

九日、新聞、日、巴、利、駐、英、國、公、使、老、德、リ、シ、候、ハ、去、ル、十、日、以、テ、我、外、務
卿、ト、長、時、間、對、談、アリ、日、其、際、英、公、使、ハ、外、務、卿、向、テ、若、シ、東、京、事、件、に、関
シ、清、佛、間、長、キ、接、点、タ、リ、テ、不、幸、ニ、逢、ハ、ル、決、然、通、商、ノ、利、益、ヲ、害、ス、ル、事、ナ、ラ、

九月十七日

海外電報

九月十七日巴黎發

英國ヨリ仲裁ヲ申出スルニ依リ在倫敦兩國

大任カシメテ此國領土清國公使曾紀澤ハ英國外務卿格蘭

ズン合ニ商議開キテ就テハ兩國ノ紛議モ平和ニ局ヲ結フ事

報知新聞十月十六日

海外電報

九月十七日巴黎發

英國ヨリ仲裁ヲ申出テタルヨリ在倫敦佛

國大使ウシントン氏ト歐國欽差清國公使曾紀澤氏ハ英國

外務卿格蘭ズン合ニ商議ヲ用キテ就テハ兩

國ノ紛議モ平和ニ局ヲ結ブベキ望ミアリ

佛領アルゼリノ土兵ノ數大隊ハ九月廿五日ヲ以テ東京ニ發セント

ス

九月十七日
英國ヨリ
清佛ノ仲裁ニ依リ

宮内省

東京日々新聞 十月廿日

外信

○清佛談判 清佛兩國ノ談判ハ如何アルベキ歟浮説交モ
 至リテ信ヲ置クベキモノ甚ダ少ナシ今其模様ヲ推考スルニ
 必要ナルベキ稍真説ニ近クセント思フ諸説ヲ聞クニ初メ曾公
 使ト佛國外務卿ト頻リニ往復談判ヲ遂ゲラレシガ何カ中途ニ
 シテ折合ハガルトナリケン暫クハ中止シテ睨ミ合ノ姿ナリシガ
 清國ヨリ依頼セシカ將々佛國ヨリ依頼セシカ抑モ英國ヨリ
 真ニ申出シカハ知ラサレ凡英國外務卿ハ兩國紛議ノ仲裁ヲ
 為スベシト清佛兩國清府(申込)込ミシゴゾ曾公使ハ佛國駐英
 大使ワッダントン氏ト英國外務卿グラントン公ノ私邸ニ會シテ相談

海防

海防

セラシキ其結果ハ如何ナリシヤ詳ナラザレモ清佛兩國ハ免
ニク用此紛議ノ仲裁ヲ英米兩國ニ依托スル様子ナリ (去九
月十六日巴里発ノ報) 又佛國內閣ニテハ外務卿ト諸公ノ議
相協ハズ恐クハ外務卿シヤルメルラクル氏ハ辭職スルニ至ルベ
キ歟ト云ヘリ (同十七日巴里発ノ報) 又佛大使ワグダントン氏ハ英
京ヨリ帰國シテ直ト佛國宰相フエリー氏ニ面會セラレ大使
ト曾ハ使ト格蘭ウヰル公郎ハ談判ヲ逐一ニ陳述セラレヌ (同
十七日巴里発ノ報) 曾ハ使モ亦英京ヨリバ里ニ赴ケレ佛宰相
フエリー氏ニ面會シテ直接ニ談判ヲ遂ゲラレワグダントン氏モ
其席ニ列リテ其談判ニ參セラルヨシナリ (同十七日巴里発ノ報)
之ニテ考フレハ清佛ノ談判ハ全ク佛外務卿シヤルメルラクル氏

九月十七日

英國人法

佛ノ中々入ル

佛知テ
英人中入後ノ事
上海
トリク天津ニ着
ト李中堂ト再會
談判

ノ手ヲ離レタルモノ歎然ラバ外務卿ノ内閣諸侯ト議ノ協
ハズト云フヲ説モ一概ニ無根ノ説トモ排斥シ難カルヘキ歟何ハ
免モアレ英國モ一旦二國ノ間ニ仲裁ヲ申込ミタルカラニハ容易
ニハ破裂ニ空ラシムル如キヲハアルマジキト信ゼラル、也
日、新聞

上海通信 (十月十日上海発) 安南一件ニ有清佛兩國ノ關係
ハ全ク絶ヘタルモノ、如クアリシガ昨今ハ又々少シク景氣ヲ持
直シタル様ニテ種々説ヲ來シ佛國德公使ニ過日天津ニ着ノ
上猶ホ李鴻章氏ト談判ヲ用キ黑旗黨ハ清國ニ属セシモノ
タルヤヲ詰問セラレタルガ李氏ニハ決シテ清國ニ關係ナキモノタルヲ
決答アリ德氏ニハ何卒同黨ヲ廣西省内ノ隙地ニ安挿シ

安南ノ泰平ヲ保タシメラレシ事ヲ申シ入レタルガ李氏ハ既ニ
本國ニ属セザル以上ハ同黨ノ如何ナルトモ決シテ關係ヲ有セザル
モノトセバ之ヲ内地ニ安挿スルコトナドハ本大臣ヲ決断ラ付シ難キ
件ナレバ若シ必ラス之ヲ要セラルコトナレバ其段ヲ奏聞ノ上ニテ御
答可致ト申サレシニ德氏ハ然ラハ自分ヲ總理衙門ニ懸合ヲ
ナスベシト其色ヲ変シ辭去セラレタルガ兼テ各國ノ公使ノ北
京ニ上ルニ李鴻章氏カ手船ナル小輪船ニテ河ヲ泝ルコトヲ
准シタリシガ德氏ニハ此談ノ不面白ヨリカ其退去ノ席ニテ
小輪船ハ借用ニ及ハス自分ノ支度ニテ北京ニ赴クベシト申置
出テ行カレタリトノコトナルガ此談ト申シ又其他ノ曲折ノ談判
及ビ其舉動トニ自竊カニ察スレバ全体ニ德氏モ上海ニ於テ

佛國
本國ノ時勢已ハ一變
セントモハ近キナリ

李氏ト談セシ節トハ少々折レタルモノハ如ク當初ハ安南ハ何モ
清國ノ屬國ニアラサレバ今之ヲ征討スルニ一言モ清國ヨリ出スルハ
ナキ道理ト申シ張ラレタルガ已ニ安南政府ヲ壓抑シ更ニ同國內
地ヲ經略スルニ黒旗ノ為メ屢々其策ヲ窮メラレ十分ニ其技倆ヲ
尽スル能ハズ去リ迎今ク此黒旗ヲ征伏センニハ今日駐越ノ師ニテハ
足ラズ佛國ヨリ更ニ兵ヲ調シ来ランニハ又々巨大ノ費額ヲ耗シ
此小兔ヲ捕フルニ幾分ヤノ全カラ費サレラ得ズ其中安南ニテハ
佛國ノ公使ハ陸軍司令官ト不和ヲ生シ已ニ軍ヲ棄テ國ニ歸ルノ
舉ニモ及ビ居レバ德公使ニハ或ハ甘ク李翁ヲ説キ落シ黒旗
ハ清國ノ為メニ辺疆ヲ固ル有益ノ兵ナリト御為メ倒シニ都合
能ク之ヲ清國ニ引受ケテ依テ安南ノ全部ヲ着服センノ妙策

九月廿七日
九月廿七日
十月十七日
十月十七日
十月十七日
十月十七日
十月十七日
十月十七日

ヲ試ミテタルニ彼天津ノ老翁ハ其策ニ氣付キ拙者ハ此厄介者ヲ
擔任スル權利ハ御坐ラヌト此網ヲ免脱シ甘ク總理衙門ニ捨
付ケ德氏ニ却テ李翁ニ逃ラレ尤モ嫌ヒ居ラル、總理衙門
ノ無首無尾ノ長詮議ニ追ヒ遣ラレタルヨリ少ク不快ナル事
動ニテ出テ行カレタルニ非ズヤト推測ヲナスガ如何ニヤ又或ハ其
他曲折ノ談ニ氣ニ障リタル事ノアリタルヤ併シ德氏モ全ク北京
ニ去九月廿七日英國巴公使ト共ニ着セラレタル由ナルガ今後ハ如
何ノ談ヲ開カルヤ此天津ノ一件ヨリ世上ハ既ニ李大臣ト德公
使ノ間ニ違言アリ殆ント決裂ニ及ブベク已ニ南京ノ取沙汰ニハ
清廷ハ彌々佛國ト兵馬ヲ以相見セテ決セラレ彭玉麟氏ニ
命シ辦理閩浙唐軍務大臣トシテ南京ニ五營ノ兵ヲ帶ビ

其他旧部ヲ幕リ合セ至急廣東ニ赴キ軍務ヲ督辦シ
南洋ノ海防ハ左總督ニヨリ之ヲ節制シ江防ハ李朝斌氏ト
會同シテ一切ヲ商辦シ北洋ノ海防ハ李大臣之ヲ經理シ更ニ
吉林ノ吳提督ヲ召シ同地ノ勁旅三千ヲ率ヒ海路ヨリ至急
天津ニ来リ之ヲ督辦セシメラレタルバ南京ノ新旧ノ兵ハ之ヲ聞キ
士氣大ニ振ヒ城中ノ紳商モ殆ンド家ヲ傾ケ軍ヲ餉セントスルノ
勢アリト申傳フガ小生ノ見ル所ニテハ彭氏ノ廣東ニ臨マルト
ノ談ハ最早去月中ヨリ承ハル所ニテ或ハ此節廣東洋館ヲ
燒キ各一件ノ為メナリト申シ居リシニ右ノ説ニテハ更ニ佛國関
係ノ為メナリト申做スガ廣東ニ人民ガ沸騰スルト其事ト言ヒ
天津ニ談判ガ始ルト其事ノ為メ彭氏ガ出張セラルト申做スラ

見レハ到底取止メ難キ談ニテ此割合ニテ參々レハ今日モ他ノ一
事ガ遂レバ又々其為メ出張ト申可レバ矢張例ノ臆測ノ尊ニ
過キズ然レヒ或レハ一説ニハ佛國ノ駐越兵モ大ニ黑旗ニ懲創ヲ加ヘ
サレバ其所望ヲ遂ゲ能ハサレバ彌々一万余ノ兵ヲ更ニ佛國ヨリ
調シ來リ其司令官ハ過日阿非理加ノ多尼西ヲ征セラレタル
某ニ命セラレタリトノ事ナレバ清國ニモ若シ此兵ノ到着シ今度ハ
一心ニ黑旗ヲ剪滅ト出懸シハ到底山野ニ生ラ偷ム黑旗ノ佛
國ノ精兵ニ當リ得ベキニ非レバ勢ヒ敗歟ノ後ハ清國ノ境界
雲南廣西ノ地ニ竄入ナスベキヲ以テ清國ハ豫シメ此竄入ヲ
防グト且此ニヨリ佛國ノ境界ニ隙ヲ生スルヲ防ント其線路
ヲ固メ置ク為メ兵備ヲ嚴シセント彭氏ニ命シ其事ヲ總理セシ

メラレタリト申モノモアリ此説或ハ近カラシカ然レヒ彌々同氏が
起馬セラルヤ其辺モ未ダ確ト定ラサルトナレハ何レ出轅ノ上ニテ
能ク其辺ノ実情ヲ報スルナル可シ近日ノ聞ク所ニテハ安南ノ
佛國公使ニハ黑旗ト和ヲ結バル、申ニ申傳ルガ前ノ德公使ノ談判
モアリ又佛軍司令長官ハ意見不合シテ引去ラレタルモアリ
彼此推測セバ或ハ負嶮ノ窮歟ト勝負ヲ争フハ到底之ヲ撲
殺スルモ亦我ニ損傷ヲ被ムル少ナシトモ弁レバ宜シク甘言ヲ以テ
之ヲ誘ヒ我ガ節制ニ帰セシムルノ良全策ニ出シヤモ難計又米
國駐清ノ復揚氏ニハ至急廣東ニ向ハル、由此ハ例ノ洋館焚掠
一件ニ付其處分方ヲ実地ニ取調ベラル、為メニテ天津ニ於テ
李鴻章氏ト尤モ親睦ナル談合アリタリト承ハルガ同氏ハ中々

無如方ノ人ニテ李翁ヲ甘ク取り入レラル、ニヨリ例ノ通り
其才ヲ振ルハル、ト存ス左總督ノ漁團巡閱モ彌々此十三日
南京出發ノ筈ニテ先ツ清江浦ニ廻リ堤江ヲ親勘ノ上ニ江
ヲ下リ當地ニモ到ラル、由ニ承ハル又數日前當地ヲ祭シ廣東
ニ向ヒタル招商局ノ懷遠號ニテ火藥彈丸其他大小砲トモメ二百
九十六箱ヲ送りタル由何シテモ同地方ノ海防ニ注意セシ一端ヲ
察セラレタリ

報知新聞 十月廿二日

府下雜報之内

○佛清兩大臣ノ問答 左ニ掲クハ過日天津ニテ佛國公使
德理固氏カ李中堂ニ面會ノ節ノ問答ナリトテ清國人ノ傳
フルモノナリ

初日一通リノ對禮ニテ閑談種々アレ凡重要トシテ記スヘキ事
ナシ

二日李中堂返礼トシテ佛公使ヲ訪ヒ且ツ公使ノ誘引ニ依リ
郷食應ヲ受ク

三日佛公使先ツ問フ貴國ハ何カ故ニ東京國境ニ兵ヲ屯集
セラレタルヤ李氏答テ曰万一黑旗兵カ國境ヲ踰ヘテ敵國ニ入カ

如キ時ハ之ヲ退ケント欲シテナリ又問フ黒旗兵ニ兵器ヲ
給セラレシハ果シテ如何李氏哲言テ哲言テ其事ナシト答フ
公使又曰ク黒旗兵ハ清人ナリ故ニ貴政府ノ管民ナリトス
管民ナリトセバ小官ハ彼等ヲ東京外ニ放逐セン^トヲ希
フナリ李氏答テ曰ク固ト彼徒ハ我叛乱ノ民ニシテ往時
敵國ヨリシテ放逐シタルモノナリ故ニ今日ハ敵國ノ管民ヲ以テ
目セガナリト公使就テ曰ク願クハ黒旗兵ノ為メニ廣西ノ一
地方ヲ与ヘラルベシ敵國ハ直ニ彼等ヲ東京外ニ放逐セント欲ス
ト李氏曰ク諾

清人ハ右ノ回答ヲ喋々評論シテ曰ク佛公使ト李中堂ヲ比照ス
ルニ公使ハ遙ニ中堂ノ右ニ出ヅト云フベシ又曰ク佛國ハ安南國ニ對

シテ甚タ妥當ノ處置ヲ施シタリト云フベシ而シテ今ヤ李氏ハ
清國ノ為メニ黒旗兵ヲ我管民ニアラストシ應援ヲナシタリ
トノ説ヲ取消シ佛國ノ云フ所ニ後テ俱ニ黒旗兵ヲ處分セン
トス既ニ斯ノ如クシハ佛國カ東京ノ紛議ヲ治ルヤ日ヲ俟ガル
ベシ云々又一報ニ李總督ハ佛公使ト問答ノ顛末ヲ皇帝陛下ニ
奏シケルニ皇帝ハ直ニ其議ヲ内閣ニ下シテ議セシメシニ内閣ハ
遂ニベシユウリン氏ヲ廣東廣西福建浙江四省ノ特命辦理大
臣トナシ黒黃兩旗ノ東京國外ニ放逐セラルノ日ニ於テ之ヲ東
京ニ退クルノ準備ヲ整ヘシムル^トニ決議セリト

海外電報

九月二十九日巴里發 清佛事件ニ付倫敦ニ於テ用ヤレ各商
議ハ終ニ整ハズ清國公使曾紀澤氏ハ直ニ巴里ニ歸府セラレバ
多分直接ニ佛國內閣長フエーリ氏ト談判ヲ開カルベシ
九月廿日巴里發 清國公使曾紀澤氏ハ佛國內閣長フエーリ氏
トノ談判ノ結果ヲ電報ヲ以テ北京政府ヘ通報セラレタリ然レドモ
未ダ何等ノ回答ナシ

時事新報 十月廿日

雜報之内

李中堂 トリクダ公使ノ回答 本月一日天津發ノ通信ニ曰ク當地ニ
李中堂トトリクダ公使ト對面ノ節兩氏カ回答セシ所ヲ支那人ヨリ
聞知センガ先ヅ第一日ハトリクダ公使ヨリ禮式上ノ訪問ニテ
一通ノ挨拶アリシノミ 第二日ハ李中堂ヨリ返礼ノ為メトリク
氏ヲ訪ヒ又氏ヲ招テ郷食應シタルマデナリシガ第三日ノ面談ニテ
談判漸ク始リトリクダ氏問フテ曰ク貴國カ東京ノ境上ニ大
兵ヲ屯セルムルハ如何 李中堂答フ黑旗軍境ヲ越テ入侵セ
ン時是ヲ逐撃スル為メナリ 問貴國ハ何故ニ兵器ヲ黑旗軍ニ
供セン歟 答我中國ニテ之ヲ供シタルニアラス 問黑旗隊ハ支那人

ナレハ又支那國ノ臣民ナルベシ故ニ貴國ニテ黑旗隊ヲ東京ヨリ
逐出スハ固ニ其所ナリ此儀如何 答 黑旗隊ハ嘗テ我國ノ臣
民タリシ一アリキ然レモ今ハ清國ヨリ逐出シタレバ清國ハ
又是ラ臣民ト認視スル能ハス 問ノ清國ハ安南ヲ其屬邦ト
認視セザルベシ依テ貴國ノ臣民ニ非ザル黑旗隊ハ佛國ノ手ニテ
之ヲ逐出スガ故ニ彼等逃レテ清國ニ入ラバ甘肅省ノ一地方撰
ビ彼ニタヘテ其居住ヲ定ムルベシ此儀如何 答 中堂之ヲナス
ベシ云々然レモ談判ノ時刻ハ左程久シカラナリシヨリ

日新新聞

十月二十三日

清佛ノ關係 九月八日刊行佛京巴黎ノ新聞據

六清國公使曾侯爵東京事件ノ新聞ニ據ルニ佛國ヲ務メ
ニ對シテ條約ヲ簽議シタリ

第一條 佛國ノ保護ハ今後紅河及三角洲ノ限ルヘキ事

第二條 清國ハヤナリニ至ルニ紅河ノ航路ヲ開キ安南ト通商
ヲ行フヲ許シ他ノ國境ハ中立地ヲ設ケテ相隔絶シ安南人ヲ
之ヲ寄シムルヘシ

第三條 清國ハ今後黑旗隊ノ入寇ヲ防遏スヘキ事

第四條 佛國ハ清國ノ安南ニ於テ主權ヲ承認シ然レ後清
國ノ領土ヲ條約ヲ承認スヘキ事

第五條 佛國砲兵ハ四十人、限ルニ

九月十日刊行 紐育ニシテ新聞

報知新聞 十月十日

安南彙報

又海防ヨリ来リシ一報ニ當地ニハ佛國理事官長アルマンハ
 黒旗隊ト條約ヲ結ビタリトノ風説アリ查スルニ此風説ハ
 アルマンガ過日本國ヘ向ケ最早兵ヲ要セザル旨ヲ電報シタルト
 黄旗兵ノ雇ヲ解キタルト中將ブーエノ辭職セシ等ニ因セシモノ
 ナラニ此風説ニモ拘ハラズ他ノ一カニテハ東京ノ佛國政府ハ
 怎テカ草賊匪徒ヲ以テ目シタル黒旗隊ト條約ヲ結ブガ如キ
 奇怪ノイアラシヤト後説或ハ是ナラシ南定ハ未ダ安南兵ニ
 悩マサル敵兵近ク城ニ接シテ堡壘ヲ築キ夜ニ衆シテ頻リニ
 發砲セリト聞ク

香港テレグラフ新聞曰ク聞ク東京ニ派遣セシ佛國ノ援兵ハ
柴棍ヨリ海防ニ着セリト而シテ其兵數ハ佛兵五百安兵百五十
人ナリト又聞ク日耳曼人大尉ブルメンブルフノ指揮セル安南汽
船ニユメシ號ハ銃槍火藥米穀ヲ搭載シテ東京沿海ノ封堵ヲ
破リテ通航シメリトテバイダゴン近辺ニテ佛國艦隊ニ抑留セラレブルダ
ブルフヲ始メ水夫一同ハ佛國總督クルービーノ最令ニ依リ拘留ノ
身トナリト

九月廿三日附海防ノ來報ニ依レバエムエム會社ノ汽船サイジ号ハ
五百ノ佛兵ヲ以テ柴棍ヨリ海防ニ着シタリ又曰ク水師提督
クルービーハ今般佛軍總督ニ任セラレ在東京ノ清兵ヲ一奉ニ
討滅スベシトノ訓令ヲ本國政府ヨリ得タリト是レ謂フベクシテ

行ヒ難シ生ハ固ク之ヲ信セサルナリ然レモ該提督ハ本月
(九月)十八日ヲ以テバイタロンニ着シ本日當海防ニ着ノ上總
督ノ任ヲ帶ブトノ事ナリ理事監長アルメンハ水師提督ニ
會スル為メ河内ヨリ海防ニ到レリ凡說ニハ不日ソシタイニ向テ
進撃ヲ始ムベシト南定ヨリ來會セル大佐バーレンノ安南兵柴
棍ヨリ着セシ援兵河内及其近傍ノ兵ヲ以テ黑旗隊ニ當ラハ
其勢ヒ前日ノ比ニハアラカルベシ然レモ總督及ビ理事監長ハ尚ホ
困難ヲ見レテアルベシ云々

○東京來信 河内守衛ノ佛軍ハ去ル九月十八日敵情揮復
ノ為メ行軍シテエ河ニ至ル迄一ノ守兵モナキ地ヲ発見シ
タリフワーヘノ臺場ハ現ニ猶ホ存在スルモ五分ニ破却サレ

夕リ佛軍ハ以處ニ於テ佛人ノ首級三十五ヲ發見シタレドモ
其内總督クヅ井エール氏ノミ判然シ其他ハ何人ノ首ナルヤ
知ル可ラズ故總督ノ首級ハ人々コレヲ本國ニ送致セントス
想フニ支那軍及ヒ黑旗賊カ此地ヲ引上ケ名ハ全ク防禦ノ
地ニアラスト信セシテ彼等ハ更ニ此邑ヨリ遠サカシリ處ニ
陣ヲ構ヘタリ中佐ニユラレジ氏ノ率ユル黃旗軍ハ其間ニ不
和ヲ生シタリ治安使アルマン氏ハ支那人ヲ助援ト為ス
欲セス故ニ黃旗軍ハ多分解散シテ之ニ代フルニ東京ノ基教
督教徒ヲ以テスベシ教徒ハ兵軍ノ事ニハ未熟ナレドモ甚々治
安使ヲ信用セルモノナリ

時事新報 十月廿九日

電報

○十月廿五日龍動發 佛國兩議院ハ昨日開會シタリ
○清國カ佛國ニ向ヒ其安佛條約ヲ破棄シ又東京ヲ開ケ渡
ス
○佛京巴里府一般
ノ噂ニ佛軍ノ援軍若シ東京ノ戰地ニ到着セハ目覚シキ働キ
ヲナシ遂ニ清國ヲ自ラ危懼セシムルニ至ルヘト取沙汰セリ

雜報

○東京政略如何 本日ノ電報欄内ニ載スルカ如ク佛國議院
ハ去ル二十四日ヲ以テ開會シタリ此度ノ議院ハ兼テ我カ紙
上ニモ報セシ通り東京事件ニ関シテ一大討議ヲ開ク

答ナレハ定メテ目覚シキ議論モ起ルナラン畢竟佛國ニ
取りテ焦眉ノ急トモ云フヘキ東京事件ヲ今日モテ打棄
置キタル如キ様子アリモハ目下佛國ノ内情安穩ナラス内閣
分裂ノ機モ正ニ迫リタルノ勢ナレハ東京ノ一問題ニ向テ其
心ヲ傾注スルニ違アラズ一時頻リニ刑戦ヲ主張シ眼中支那
ナレト迄ニ誇言シタル議員等モ漸ク其尾ヲ收縮シテ寧ニ
平和論ヲ和トスル様子ヲ現ハシタルヨリ清國公使曾紀澤
氏ハ此機失フベカストイハタ計リテ其語ニ角立テ本日ノ
電報ニモ見ユル如ク清國カ佛國ニ向ツテ其安佛條約ヲ破棄
シ又東京ヲ明ケ渡ス一ヲ要求シタル官報ヲモ公布スルトハ
ナレリ斯ル一ノ有様ナレハ安南在留ノ佛國將校ハ本國政府

ノ決心如何ヲ知ルニ苦シミテ断然攻撃ノ地位ニ立ツ
能ハズ佛國將軍ブーエ氏カ香港ニ向ケ出發スルヤ否佛人ハ
一方ノ助援シテ備ヒタル黃旗兵ヲ解散シ本國ヨリノ援軍
モ兎角其到着ノ延引スルヨリ黑旗兵益々其勢ヲ張り佛
國ニテ安南ニ新築シタル保塁ハ今尽ク黑旗ノ手ニ落テ纔
一堡ヲ存スルノミ又近日ノ風聞ニ據ルニ佛國使節ハ一シ氏
ハ黑旗兵ト平和條約ヲ結ビタルバ最早黑旗兵モ勝ニ
棄シテ佛兵ヲ襲撃ヲ止ルナリト云ヒ或ハ支那人追々安
南ヲ引去リタルヨリ黑旗兵モ進撃ノヲ見合セ居ル也ト云ヒ
判然之ヲ知ルニ苦ナトモ此度佛國議院ノ決議次第ニ東
京ノ政略如何ヲ決スヘキナリ本旨ノ電報ニ記スルカ如ク援軍

ヲ東京ニ送りテ目覚シキ働キヲナシ遂ニ津國ヲシテ自ラ
忌憚セシムルニ至ルヘキカ尚ホ後報ヲ待テ其詳細ヲ掲クベシ
○英佛ノ仲裁 去九月十曾英國外務卿グラントン侯ハ就駐劄
ノ佛國公使ワウヂントン氏トワルマー、ヤツスルニ於テ清佛文涉事件
ノ談判ヲナシ夫ヨリ英國外務省ハ北京駐劄ノ英國公使ハア
クス氏ヘ長キ電報ヲ送りワウヂントン氏カ提出セシ佛國ノ申出
ニハ英政府モ大ニ左祖スル旨ヲ北京政府ニ通牒セシメタル由
其佛國政府ノ申出ハ清國ニ安南ノ主權ヲ讓与シ安南國王ノ
繼嗣ヲ定ムルノ權ヲモ渡シ然ル後清佛兩國カ安南ニ於ル中
立線ヲ穩便ニ議定スヘシトノ一ニテハバクス公使氏ハ此箇條ニ
基キ清佛兩國ノ間ニ立チ勉テ調停ヲ速ニスルノ任ヲ受ケタリ

偕同ノ旨ノ夕刻ニハワウヂントン公使ヲカツスルヲ出發シ引違
テ清國公使曾紀澤氏ハ右ノ佛公使英國外務卿ノ會合ニ臨
マントフホルケストンヨリ同所へ來着セシニ會合既ニ終リ各跡ニテ
其議論ニ與ルヲ得サリシカ英國外務卿ヨリ佛國ノ申立ヲ聞
知セシカハ大ニ満足ノ意ヲ表シタレ凡北京政府ヨリノ指揮アラサ
レハ一己ノ所存ニテ断然タル返答ニ及ビ難シト云ヒタリ目下清佛
文涉事件ノ取沙汰ハ虚中ニ虚ヲ傳ヘテ信ヲ置クニ足ラサルモ
アラサレ凡右ノ一報ハ蓋シ其實ヲ得タルモノナルヘシ左レハ現在就劄ノ
市場ニ支那ノ諸銀行ハ更ニ信用ヲ墜サズ貿易ノ景氣
依然トシテ變動ナキモ亦清佛間ニ和平ノ調停望ミアルカ為ナル
ヘシ

○シユフェルド氏ノ意見 彼朝鮮ニ赴テ米韓條約ヲ取結ビタル
米國ノユモトル、シユフェルト氏カ近頃清佛關係ニ對シテ合衆國
ノ執ルベキ方向ヲ述ヘル意見紐育ヘラルドニ見ヘタリ其大略ニ第
一支那ハ佛國ト開戦スルニ正當ノ辞柄ヲ有セズ回顧スルニ千八百七十
四年佛國ハ安南國王ト獨立對等ノ資格ヲ條約ヲ締盟シタルニ
清國政府ハ何タル故障ヲモ陳セズ畢竟今日佛安二國ノ爭ハ
只獨リ安南カ該條約ヲ違背シタルカ為ニテ支那國ハ其境上ヲ
自衛スル文ケニ止レハ固ヨリ正當ナルヘシ去七十六年日本國ハ朝
鮮政府ト條約ヲ結ビ八十二年合衆國政府モ同ク條約ヲ結ビタリ
孰レモ朝鮮國ヲ充分ノ自主國ト見做シ支那皇帝ノ主權
アルヲ認メズ蓋シ支那ノ朝鮮ニ於ルハ猶安南ニ於ルト同一

ナルニ朝鮮條約ニ支那國曾テ何等ノ異議ヲ唱ヘザレハ又安
南ニ對スルモ佛國ト爭フヘキ理由アラズ然レモ方今各國時ニ戰爭
ヲ開クキニ非ス清國カ佛國ト相爭フニ至ルモ亦知ルヘラスト虫モ
其理由タルヤ清國カ安南ニ對スル主權ヲ維持セントスルニアラズレテ
唯近年該國カ其海陸軍ヲ擴張シタルハ之ヲ恃テ兵ヲ弄シ以テ
自國ノ地位ヲ世界ノ一強國ニナサン為ニキリト云フノ外ナレ事ヲ突
佛國カ安南ニ於ルハ猶英國カ印度緬甸ニ於ル和蘭ノジアヴァ
及ヒサマトラニ於ル或ハ西班牙ノフィリピン群島ニ於ルト同一ノ
事ニシテ唯優等ナル人種カ劣等ナル人種ヲ征服シテ之ヲ支配
スル最上權ヲ有スベキヤ如何ハ問ニ外ナラス故ニ此場合ニ臨ンデ
我合衆共和國人民ノ感情ハ無論佛蘭西共和國ノ人民ニ

左祖セザルヘカラス其故ハ兎ニ角安南カ佛國ニ征セラレテ是ニ服
從スルモ多少文明國トノ交接ヲ以テ自國ヲ益スルニ疑ヒナク又改
洲ニテ唯一ノ佛蘭西共和國モ之カ為ニ外ニ競テ内ヲ固ムラ得
テ歐洲ニ民庶主義確立ノ端ヲ開クベケレバナリ尤モ清國用戰
ノ殺氣ハ大ニ支那國民ノ恐懼ヲ引起スニ疑ナケレバ是固ヨリ
問フ所ニアラサルナリ (未完)

東京日々新聞 十月一日

雜報

○德公使歸國

佛國、後トリク氏ニハ既ニ特命ノ使命

ヲ終ヘラレタレハ去ルニ十七日佛國軍艦ウラルタ号ニ乗組テ
清國ヲ辞シ我國ニ廻リテ本國ニ歸向セラレヨシ一昨日ノ
メイル新聞ニ見ヘタリ清佛ノ事未ダ理ラザルニ既ニ使命
ヲ果シテ歸國セラルト云ヘルガ其使命トハ如何ノ事ニヤ

トリク此

ヒナリ改ノ上、高留セリ并上、一面来ルトナリ

トリク日本、艦ニ合タク思フヨシ

東京日々新聞 十月二日

外信

清佛事件ニ関スル凡説 本月九日巴里發ノ通信ナリト云フヲ見ルニ海防府ニ在テ佛兵ノ指令官タル佛將バーデン氏ハパクニンニ於テ清人ト戦ヒ清人敗走シタリ佛ノ軍艦ハ其走路ヲ絶ント計レリ此時佛兵ハ僅ニ五百名計リナリシ黒旗兵ノ中ニハ傳染病ニ感シテ斃ルモノ多ク此ガ為メニ遁レテラカイノ方ニ引去レリサレドモ佛兵ハ最も健康ナリトノ説アリ云々又云ク前説虚ナリハクニンヨリ雲南ヘ挂ケ清兵ノ屯在セルモノ實ニ三万人ニ上レリ佛兵如何ニ猛ナリト虽モ僅ニ數百ノ兵ニテ打勝ツベクハ思ハズト孰レ

カ是ナルヲ知ラズ

東京日々新聞十月五日

外國電報

十月三十日倫敦發

佛國ノ諸新聞ハ其社説ニ於テ

東京事件ニ関シ清國ニ對シテ益々憤激スルノ意ヲ表シ
タリ

(横濱刊行メール新聞)

東京日々新聞 十一月六日

外國電報

十一月一日倫敦發

佛宰相フエリー氏ハ其代議士院

ニ於テ我兵ソシタイ及バクミンヲ隔レシ時ニ當リテ清國敢
テ宣戰ヲ為サバリシカ故ニ我佛政府ニ於テハ清國ニ對シ
テ開戰ヲ宣布スルノ意ナシト陳述セラレタリ

(横濱刊行マイル新聞)

雜報

駐清佛國大使

佛國官報ニ據レハ去ル九月廿日ニ瑞典及

諾威駐劄特命全權大使兼全權公使バトノール氏ハ駐清國
佛蘭西共和國特命全權大使兼全權公使ニ任セラレ前任トリ

クー氏ニ代リタリト佛國ルタン新聞ニ見ユ

東京日々新聞 十月廿日

外國電報

十月廿日倫敦發 清國政府ハ各國政府(佛國政府共)ニ
告白書ヲ送ラレタリ其書面ハ先ヅ清國ガ安南國ノ上ニ
有スル宗主ノ權ヲ再論シ安南ニ對スル佛國ノ處置ニ自
テ抗論シ殊ニ清國ノ主權ヲ認メザル順化府ノ條約(佛
安南)ニ對シテ抗論シ且ツ今日ニテモ平和ニ葛藤ヲ解カ
事ハ出來得ベキモ若シ佛國ニシテ清國ノ屬領ヲ東京ニ於
テ尚ホ不法ノ所業ヲ伸張セントセバ我ヨリ用兵抵抗ヲ為サン
事ハ其結果ナルヘシ其義ニ就キテハ佛國政府ハ獨リ其
責ニ任セサルベカラストノ旨意ヲ記載シタリ(マイル新聞)

海防省

○十一月十八日倫敦發 シヤルメルラクル氏ハ遂ニ佛外務卿ノ職ヲ辭シ宰相フエリー氏ハ其職ヲ兼ラセタリ。○倫敦ノ新聞紙ハ清國ニ對スル佛國ノ政略ヲ曖昧ナリトシテ論評ヲ逞クシタリ

○同日同所再報 フエリー氏ト曾公使トノ間ニ再應ノ談判ヲ開キタリ。○佛兵若干更ニ東京ニ向フテ拔锚シタリ

(メイル新聞)

時事新報 十月廿日

電報

○十月十八日龍動發 佛國外務卿シヤルメルラクル氏ノ辭職ハ公然發布ニナリ是ニ由テ首相フエリー氏ハ外務卿ニ任セラレタリ

○龍動ノ諸新聞ハ佛國カ清國ニ對スル政略ハ所謂模稜政略ナルヲ評論セリ。○佛國外務卿フエリー氏ト清國公使曾紀澤氏トハ再ニ談判ヲ始メタリ。○佛國ヨリハ援師又々東京ニ向ケ出發シタリ

○十月廿日龍動發 支那政府ニテハ佛國ハ勿論其他ノ各國ニ向テ我カ政府ハ更ニ安南ヲ統御スルノ申條ヲ言ヒ張リ安南ニ関スル佛國ノ行為ニ對シテ辯駁ヲ試ミ特ニ支那ノ統御權ヲ認許セサル順化府ノ條約(順化府ニテ取結ヒ安南佛條約)ニ関シテ論スル所アラントストノ告示文ヲ發布シタリ此告示文ハ清佛平和ノ談判ハ今日ニテモ尚行フヘカサルニ非ストノ意ヲ諷示シタレモ若シモ佛國ニシテ東京ノ支那領ニ尚無法ノ所為ヲ行ハントナラハ干戈ヲ以テ之ヲ

拒絶スルハ勢ノ然ラシムル所ニシテ事ノ成行如何ハ唯佛國政府ノ所為如何ニ在ルノミト附記シアル由

清廷ノ告書 十月二十日 日新報

東京ノ紛議ハ清佛間ニ連結シ益々鮮々今ヤ將ニ危急ノ情勢ヲ顯シ

初ニ外務卿ニヤルヲクル君東京遠征ノ議ヲ決シ方策ヲ理事員長ハヤシク授ケ海軍將校ヲ充進スヤ想フニ東京西南ノ地ハ國弱ク兵鈍シ佛國鐵艦精兵ヲ以テ之ニ其境ニ臨ム越南ノ年々嗟々思ハレト思フヤラン遠東ノ實勢ヲ知ラズ事家ノ言議勸告ニ怪ハハカシキリ蓋シ外務卿ハ盛々侵略ヲ義行シ版圖ノ海外ノ廣クノ利ヲ收シテ一ニ黑旗ヲ抗拒シ過シ佛軍輒ニ其利ヲ失ヒ頻々軍機事ヲ窺ヒテ至レトハ思フヤ然レテ清廷ノ議論ハ外ニ強リ曾紀沢大使ノ談判ハ斯レモ嚴迫スレトハ意外ニ思ハレ然レテ東京ノ遠征曠日彌久未タ全ク其知リ奉セシヨ清國ノ都合ハ中行届ス。非侵略主義論ハ漸ク佛國ノ勢ヲ得テ

法蘭西
遠大

議院ニシテ遠征ヲ不可トスルノ論起ラシトタル色ヲ顯セリ。○馬達加斯加ノ征討
 頭ニ歐洲ノ物議ヲ來シ内閣モ為其地位ヲ保ツ危カルベキ狀アリ右ノ勝ナレハ
 清國ト佛國ト議論ハ幾ク今日モ其地ヲ易ヘ佛國ハ表面ヲウケカラスニシ
 内ニ於テ清國ト向テ其請求ハ一歩ヲ讓ラズルヲ決意アリ示ス如シ此上佛國ト一
 歩ヲ退クニ非テ清佛二國間ノ平和ヲ望ミ難カレリ思ヒタリ此ハ外務卿ハ十月
 十八日、倫敦新聞ニ依テ其職ヲ辭シ大宰相フエリ卿ハ外務ヲ兼シ
 たり再ニ曾大使ニ談判ヲ始メ今ヤ曾大使清廷ノ意ヲ奉テ請求スル所ヲ
 見テ佛國トシテ敢テ之ヲ承諾スルヲ能ハズト云フ程ニ非ルヘキ歟本月十日ノ字
 林滬報ニ又聞曾侯與法外務大臣花利君會議時出章程五則
 以テ花利侯然無以應也今將章程照錄供覽計開

第一條 中國准法國保護越南地方以紅河及三南洲為界限

第二條 中國須在紅河至白良河水道開一雲南通商市場其中間
 既脫地復留一段其沿越南國境者由越南兵守護

第三條 中國今後亦須慎防黑旗

第四條 法國當認越南為中國主權然後中國准法國在順化府
 所立之條約

第五條 中國准法國出兵於越南國內其兵額不得逾四千名
 一見テリ是ハ十月八日ノ事ナリト云ヘリ其確信ハ知ハラス尚ク清國ノ請求
 ヲ規テ足レハキリ

然レ清國政府ハ本月二十日、倫敦電信ヨリ清廷ハ各國政府ニ告白
 書ヲ贈リ其中南ノ宗主權ニテ再論シ中南ノ關係ニテ佛國ノ獨斷ヲ
 抗議シ尚ク平和協議ヲ望ミテ難ク佛國ニ於テ此上言東京ノ清

國屬領に對し不法行為ヲ伸張スルヲ用兵抗禦ノ結果アルベシ
國獨リ其責ニ任セサルベカラザル者ヲ前陳シタリト是レ本月十八日事ナリト聞
ク此報ニシテ信ラハ清國ニ益ク固ク其議ヲ取テ復々一歩ヲ退カレ國
是ヲ定メタリト覺セリ

特ニ關心スヘキハ總理衙門ヨリ我國駐劄ノ清國公使ノ言ハモ開戦ノ期
迫キ迫レリト電報アリト事ニシテ其實勞ハ知レテモ中外皆ニ此切迫
ノ事情ニシテ見テ歸着ノ如何ヲ察スル及ハズ

然レ如此告白モ不構ヲクルハ御ハ辭職ヲ力ニシテ御自ラ曾大使
ニ對シ再ニ談判ヲ開カレ以テ中南事件ノ紛議ハ其局ヲ結ビ東西二大國
ノ間ニ戰爭ヲ宣布スルニ至ラザルヲ切望スルニ外ナラズ

清佛關係日報 十月二十六日

佛國外務卿ニシテハ君ガ老ハ日其職ヲ辭シ宰相トナリ氏ハ外務卿職

ヲ兼テ更ニ曾公使ノ間ニ談判ヲ開キテ事非ニ清國政府ヨリ各國政府
告自書ヲ送リ若シ佛國尚フ不法ノ處置ヲ致清國ノ屬領ニ東京ニ施サハ清
國ハ兵角ニテ之ニ抵抗スヘト申シ出デシ事ハ本日ノ電報内ニ詳ナリ今テカ
新聞ニ記シ處見セリ

我ニ最モ確カニ助ヨリ聞キ込ミ名報ニ據ル去
ルニテ總理衙門ヨリ東京ニ清國公使館ニ達シ名電報東京事件ノ自キ
我國ハ佛國ニ談判ハルベテ調ハハ開戦ハ免レハラスト有リト聞ク 此語

我ニ最モ晚ク聞キ込ミ名報ニ據ル去
モ實ニ助ヨリト記ス又ヘラルト新聞ガ 佛國外務卿ノ辭職ノ事ヲ記シテ正リ
一氏ニ代ラハ平和ノ局ヲ結ベト事ヲ記載シ一節ノ次ニ又左如ク陳ハ

其報ニシテ東京ニ清公使ノ總理衙門ヨリ佛國ニ談判九テ満足ナカ

六用戰近きるベレト電報ヲ得シタリト云ヘリ

且曾公使、佛國に對シテ清佛談判中、西南に戰爭の傳セシメテ申レ込ミ
タリシニテ若シ佛政府、テ否ト云ハ、先テ今國、清國ヨリハ開戦ヲ宣布セシム
曾公使ハ果シテ此威迫ヲ行シト思テ、セシメ、マ否ハホク、知レバラスト雖モ先モ清
國ノ方ヨリ一大戦ヲ開ク、先獲ラ着シト事ハ確カベレト陳セリ固ラ事ノ信傳
説ノ當否ハ記者シ之ヲ保セズト雖モ讀者ノ參考モト斯ク記レシ

十月二十日倫敦發

日報 外國電報

十月二十六日

倫敦(イギリス)新聞(巴黎)ヨリ電報ヲ得ケリ

曾大使ハ佛兵若シバクシテ攻撃セバ是レ開戦ヲ宣布スル期ナリト告ケリ

然レ佛政府ハ總督クルベリニ進撃ノ命ヲ傳ヘリ
ハクシニハ北京府

右横濱ニル新聞

清佛ノ葛藤 十月二十六日

而國ノ葛藤益々結テ詳ク曾公使ヲ佛政府向テ佛兵若シバクシテ府ヲ攻
撃セ之ヲ我國ヨリ開戦宣布ノ期ト認ケベトテ手詰メ談判及ヒ佛政府ハ
一向ニ構ヒテ征東總督クルベリニ命ヲ傳ヘシタル佛國モ亦
一歩ヲ讓ラズ銳鋒ヲ清國ニ向テ欲スルノ意ナク此方ニテ總理國公使
ノ北京退去、前李中堂ト標メ、談判及ヒシモ一トシテ佛國ノ要求ヲ承諾

セリシカ之白旗兵行テ黒旗軍、與シ共佛兵ヲ東京、^{〇〇〇}河内^{〇〇〇}國ニテ報
 アリヨリ清國益々奮起一歩ニ佛國ニ讓ラスト決心スルヲ又ニル新開、清佛
 談判ノ模様ヲ記テ其要者ヲ抄出セリ、曰ク從清廷ヲ各國政府ヘ送リテトテ告
 白書中、清廷ノ官立権ヲ主張シ、敢テ珍々事、非ス又頃化府ノ條約、
 就テ公然抗論シテ、既其條約、調印アリテ事、公々トシテ後、真之抗論
 セシク、又今日之ヲ異トス、足ラス、只東京ハ清領トシ、何ト地ヲ指シ、
 歟未確カ、清領ナリ、死リ、名處、ア、聞カス、今最近ノ諸電報、比較シ、之ヲ察ス、カ
 メ、月頃、清國ノ發議、紅河ヲ以テ清佛二領ノ境界トシ、其河北ハ清
 國屬シ、其河南ハ佛國屬シ、シテ、在リ、申出、從フ時、紅河ノ三叉口
 ハ佛國ノ有、非シテ其最モ熱心トシ、富源ヲ割ク、レ、名、ア、フ、ベ、レ、サ、佛、相、三、
 一、其、議、修正、カ、ヘ、テ、清國ハ河北ノ地ヲシ、ク、北、一、府、フ、ン、ホ、ア、ム、至、レ

マテヲ領シ三叉口ノ地ハ全ク佛領多シトヘク東京、沿岸ハ勿論紅河、北、フ、ン、ホ
 ア、リ、テ、五、ツ、ク、ン、ヲ、經、テ、コ、ロ、バ、ン、ニ、至、シ、テ、皆、佛、領、ク、レ、シ、ベ、シ、ト、云、張、セ、リ、善、之、
 然、佛、國、僅、ク、三、角、形、ノ、小、部、分、ヲ、有、テ、過、キ、ス、テ、殆、シ、東京、ヲ、失、ヒ、
 之、ハ、之、ヲ、拒、レ、テ、サ、カ、ハ、海、防、ヨリ、河、内、ニ、至、マ、テ、ノ、通、路、ハ、タ、イ、ビ、ン、運、河、ニ、依、レ、
 運、河、ヲ、以、テ、佛、國、ハ、河北、領、地、ノ、境、界、ト、ス、ベ、レ、又、紅、河、ノ、事、ハ、就、キ、
 ア、ム、至、テ、通、國、航、神、國、勝、キ、レ、バ、レ、タ、ン、ホ、ア、ニ、稅、關、ヲ、設、テ、其、流、至、
 カ、レ、ン、之、ヲ、承、諾、ス、ラ、ハ、清、廷、ニ、異、議、ナ、シ、テ、稍、一、歩、ヲ、讓、シ、タ、リ、
 レ、ハ、紅、河、ノ、三、叉、口、ノ、西、南、間、ハ、分割、ス、ル、在、リ、早、ク、ハ、清、國、ハ、佛、國、ガ、要求
 ノ、半、分、ヲ、許、シ、和、解、セ、ト、欲、セ、シ、モ、ト、見、エ、タ、リ、蓋、シ、此、申、シ、込、ミ、ハ、十、月、六、日、ノ、事、ナ、リ、
 然、佛、國、ハ、早、ク、事、既、憂、フル、ニ、足、ラ、ス、ト、思、惟、レ、タ、リ、
 決、意、シ、烈、シ、テ、東京、ノ、攻、撃、カ、ラ、盡、シ、タ、リ、又、後、ハ、清、國、ヲ、強、迫、シ、タ、リ、
 銳、意、ト、東京、平、定、事、
 德、利

國公使が恭親王、直見參、為シク事之、シテ、蓋、德、以、カ、北、京、に、赴、カ、レ、ハ、決
 シテ、談判、ノ、為、ニ、赴、ク、非、ス、萬、里、長、城、一、覽、為、シ、途、次、北、京、に、寄、リ、テ
 恭親王會見、補、テ、リ、カ、終、佛、政、府、ノ、趣、意、ヲ、親、王、傳、ヘ、テ、申、セ、レ、ル、ハ
 清佛談判、佛兵が全ク黑旗兵ヲ廢、殺、シ、東、京、ヲ、平、定、ス、テ、延、引、セ、ラ、レ、タ
 シ、夫、レ、附、キ、テ、我、政、府、ヲ、モ、勇、剛、ノ、方、略、ヲ、執、リ、銳、意、進、撃、シ、後、事、セ、ン、ト、リ、ト、申、サ
 レ、タ、也、凡、清、廷、ヲ、敢、テ、之、ノ、驕、ス、例、陽、々、強、迫、ノ、勢、ヲ、示、ス、モ、ナ、リ、ト、思、ハ、レ
 ケ、ル、也、此、時、當、テ、佛、國、兵、ヲ、出、テ、進、撃、シ、命、ジ、將、サ、東、京、ヲ、併、吞、セ、ン、ト、ス、ル、ノ
 故、ヲ、シ、テ、總理衙門、ニ、モ、初、テ、德、以、ノ、言、ニ、思、ヒ、當、リ、サ、テ、ハ、佛、國、ノ、主、意、ハ、侵、掠
 シ、テ、アル、コ、ト、ヲ、大、打、ち、揚、シ、彼、ノ、電、報、ヲ、如、キ、者、白、書、ヲ、發、シ、諸、國、ノ、清、國、意、見、ヲ
 示、セ、レ、タ、事、ト、ベ、シ、右、ノ、依、テ、之、ヲ、見、シ、彼、東、京、ヲ、清、領、ト、ス、ル、事、ハ、紅、河、三、叉、口
 ノ、北、方、ノ、一、半、殊、ハ、ハ、ク、シ、テ、有、リ、此、府、ヲ、清、兵、既、比、ニ、テ、有、リ、ソ、云、フ、事、ト、ベ、シ、既、

一月程前、佛兵此バクシテ、殆、ク、圍、メ、セ、ル、カ、兵、足、ラ、ズ、シ、其、事、モ、止、シ、カ、若、シ、之、リ
 勢、テ、清、兵、會、戰、シ、テ、ラ、シ、ニ、是、ゾ、真、ノ、清、佛、ノ、開、戦、ト、ハ、カ、リ、ニ、攻、キ、リ、シ、ハ、幸、ナ、リ、今、マ
 清、國、ノ、主、張、ス、ル、領、地、ハ、只、シ、名、義、上、ト、モ、ナ、ラ、ズ、シ、テ、實、際、兵、ヲ、以、テ、之、ヲ、占、領、シ
 タ、ル、モ、ト、シ、テ、ハ、キ、ナ、リ、シ、一、以、テ、清、佛、開、戦、ノ、一、班、ヲ、伺、ヒ、知、シ、足、レ、バ、キ、歎、息、シ、佛
 國、ノ、情、況、ヲ、察、ス、ル、佛、國、政、府、ノ、實、ニ、内、外、ノ、困、難、ヲ、迫、ラ、レ、ル、モ、ト、シ、テ、ハ、キ、歎、息、清
 國、ノ、葛、藤、勢、ク、之、ヲ、憂、先、ッ、内、ニ、ア、リ、テ、ハ、東、京、ノ、遠、征、ヲ、非、議、ス、ル、最、モ、多、ク
 議、院、開、場、後、モ、類、若、シ、レ、ク、一、時、ハ、内、閣、非、難、ノ、投票、ヲ、為、ス、テ、至、リ、又、内
 閣、中、ニ、モ、議、論、ニ、派、分、テ、外、務、卿、ニ、シ、ル、メ、ラ、ク、ル、以、テ、此、際、ニ、其、職、ヲ、辭、セ、ル
 ハ、カ、ル、ノ、止、ム、ヲ、得、ル、事、情、アリ、外、向、シ、テ、ハ、馬、島、ト、蘭、係、騎、虎、勢、ミ、テ、是、ハ、
 中、止、ヘ、カ、ズ、強、隣、ノ、獨、塊、伊、三、國、ノ、向、盟、ヲ、固、リ、ホ、ル、ト、マ、シ、セ、ウ、ヤ、ハ、
 二、國、モ、亦、其、同、盟、中、ニ、加、リ、テ、加、ヘ、テ、西、皇、海、唇、事、ヲ、シ、西、國、

歡心ヲモ失ヘリ又征東ノ由兵辱シ黒旗軍ノ愾ヲ前ノ總督フーイーハ
理事員長ト議協ハガキ國歸リ糧食難カズ糧兵少シ或西人ノ云ヘラリ
由國島里遠東ノ兵出スニ決キ四方ノ兵數超ス能ハズ之ニ超過セハ
第一運送船事ヲ欠リテ若シ清國ノ所戰ル時ハ英領印度地方ニ
申スニ及ス東洋諸國ノ局外中云々ハレバ石炭及ヒ兵糧ヲ購求センニハ埃
及以東其處ナルニシテ之ヲ實國難ク略スリ 十月二十六日也

時事新報 二十六日

今日掲載ノ電報ノ未ダ詳ク之ヲ信用シ難ク何トモ本月十六日ノ外務卿セルラール氏ノ其職
ヲ退キ宰相フーイー氏之ヲ繼グラセル氏ノ代テ前使ト談判ノ開キリ其始未ダ分明ナラザリ
兼テ平和論者ノフーイー氏局面當リ如何ト談判者トモ又其談判ハ既ニ破裂セリ否未ダ判
明ナラズ然レ兩國ノ事端ノ向リノ謂フラス 橫濱ヘラレト新聞ニ佛清再ニ談判ヲ始メ計リテ
本々其結着ヲ見ルモ俄ニ事端ノ向リノ不意激シ又不可行ナリト記シハ理支ニ或ハ然ラ
十月十日龍動發 二十九日
清國公使曾紀沃ハ既ニ巴黎有ヘ歸着シタリ
此公使前々外務卿セルラールト談判合ハズ倫敦ヘ返リシカ

時事新報 十月廿六日

雜報

○前虎後狼 巴黎府民カ西班牙皇帝アルソシホ陛下ヲ侮辱
シタルヲニ就テハ佛國內閣ノ議論モ一時紛然トシテ起リ其餘響今
ニ収ラス此一事件ハ佛國ノ現在未來ニ向テ其關係スル所少ナカ
ラスト云フ佛國ハ先年普國ト戦ヒ終ニ敗軍シテ城下ノ盟ヲナシ
テヨリ常ニ普國ヲ憤恚シ一旦機アラハ多年會社ノ恥辱ヲ
雪カント日夜兵備ヲ怠ラズ且ツ普國ト交戦スルニ當テ聲
援ヲ乞フヘキ同盟國ヲ得シモノト十年一日ノ如ク種々ニ心ヲ
碎キタルガ今日ノ處ニテハ壞太利ハ到底已レヲ援クルモノニ非ス
魯西亞ハ内ニ虛無黨アリ外ニ土耳其トノ關係アリテ連モ之ヲ

時ハカラス去トテ英國トハ埃及事件馬島事件杯ニテ隱然
不和ノ有様アレバ是レ亦容易ニ依頼スルヲ得ス伊太利トノ
交誼ハチニーエス征討ノ為メニ幾分ヲ損シタレバ共ニ事ヲ為ス
ベカラズ左レハ近頃マデ佛國カ僅ク頼ムベシト思ヒタルハ唯西班
牙國ノミニナリガ嚮ニ巴黎府民カ西皇ヲ侮辱セシヨリノ遂ニ西
班牙人民ノ愛ヲ失ヒテ却テ日耳曼ト同盟セシムルニ至ラシメ
タルハ所謂敵ニ糧ヲ送リタルモノナラン左レド佛國ハ永ク西國
ヲ敵トスルヲ得ス若シ之ヲ敵トスレバ護國ノタメニ大不利益
ニシテ抑モ自ラ堪エベカラズ夫ハ何故ト云ニ普西兩國連合シテ
佛國ヲ襲ハハ其海軍ハ兩國ノ軍艦ヲ防クニ寸暇ナク又其
陸軍ハ普國ノ陸軍ヲ防クニ急ナルヲ以テ其南部ヲ顧ミルニ

暇アラズ西班牙ノ陸軍ハ其隙ヲ伺フテ馬ヲヒレニス山ノ
第一峯ニ立テ佛國ノ南方ヲ壓スル時ハ前門能ク普魯
西ノ虎ヲ防クモ西班牙ノ狼ヲ後門ニ防ク能ハルベシト米
國新聞ニ論記シタリ

○電報ノ信偽如何 本日ノ電報棟内ニ見ユル如ク十一月二十日
龍動奈ノ電報ニハ清國公使曾紀澤ハ佛國カ北寧ヲ攻撃シ
タルハ清佛ノ爭端トシテ見ルベキ旨ヲ告白シタルガ此際佛國
ニテハ安南駐在總督クルベール氏ニ進撃ヲ始ムベキ命令ヲ傳
ヘタリト掲載シアレドモ其信偽如何ハ未ダ之ヲ詳ニスル能ハズ
何トナレバ本月十日ノ電報ニ載ル如ク佛國外務卿シヤルムラクル
氏ハ既ニ其職ヲ退キ首相フエーリ氏之ヲ継ギラクル氏ニ代テ

清國公使曾紀澤ト再ヒ談判ヲ始メタルニ其談判ノ始未未
カ分明ナラザレバナリ豫テ平和論者ト聞ヘタルフエリ一氏ガ佛清
談判ノ局面ニ當リ如何ナル談判ヲ為セシヤ又其談判ハ既ニ破
裂ヒシヤ否未ダ判然タズガルニ突然兩國ノ爭端ヲ開クノ
謂アラズ横濱ヘラド新聞ノ如キモ亦佛清再ヒ談判ヲ始メ
タル計リニテ未ダ其結着ヲ見ガレニ俄カニ爭端ヲ開クノ不
思議ナリノ又不可行ナリト記シタレドモ理夫レ或ハ然ラシカ

正月三十日 日報

倫敦電報 十月二十六日 清佛事件ハ英國其調停ヲ為サノ目的ヲ
以テ英政府ト佛政府ト間ニ談判ヲ開キタリト風説頻リト

○英政府ハ支那艦隊ヲ援スルニシテ全クヤシキ
以上横濱ノイニ新聞

十一月廿日 清海軍卿三ノ利ハ同ツツラス以テ代リテ支
那海艦隊一部ノ指揮官成リ

同十二日 及 獨國皇太子ハ西班牙國ニリツト有リ到ル依テ大ニ世
人感動ヲ与ヘタリ

獨西ノ利益ヲ
親密ト要ス

十月三日 日報

○十月二十七日 倫敦電

- 一 佛國代議士院ノ委員會ニ東京遠征費募集ノ議案ヲ可決セリ
- 一 佛國陸軍卿ハ何時モ六ヶノ兵ヲ東京ニ向フテ發スヘキノ用意アリ

ト言ハレタリ

- 一 佛國征東總督ノ任ハブローニ將軍歸國ノ後ハハクルベリ提督ノ代リニ處ナリトシ 北度將軍ミレーノ之代リニ總督トあり 近キニ印綬ヲ帶テ東京ニ來ルニシテ 諸事ニベリ提督及理事院長ハミレーノ代リト打合ヘシトシ 東京平定事ニ從ヒルベシト云フ 又ハミレーノ代リニ佛國ノ海軍ヲ率ヘテ 風潮アリ
- 一 前佛國征東總督 フロニエ將軍ハ兵七萬ニ出陣ノ上東京ヲ平定セシコトヲ 命セラル、コトヲ望ミルベシト云フ
- 一 兵ノ語ニソノタイトニシコウヲ陷イルニ甚ク要易ナレトシ 北邊府ハ海備モ殊ニ

嚴より中へ之ヲ陷ルルハ難アルベシ

佛國代議院極左黨より東京征討事を閣シテ内閣に信用の有無ヲ
試ミ之ハ内閣に信用スルノ黨多數ヲ得ル者公使之ハ清佛間開
戦ノ第一階をベキ事實ナリト思考セラレタルニ若シ宰相此上東京極兵
軍費ヲ議院ニ要求ハ清兵必東京進入スベシト倫敦新聞に見ユ

十月三日刊行佛國フヒガフ新聞雲南總督ハ一萬四千ノ兵ヲ率テ南
東京へリ佛軍ノ本陣を河内ヲ距テ百三十英里ナカバシラ台領スベ
キノ命ヲ勞リタリト記載セリ

一十月廿日巴里發報云清國公使付一等書記官某氏ハ人々詰リテ今
日ノ處ニテ清佛間戦ハ至ハキハ確カナリト云ヘリナリ

一佛國駐劄卿辭職ノ原因ハ佛カ公然英國ヲ清國ヲ鼓舞キ佛國抵抗セシム

ト云レシニ依リ巴里通信見ユ如何ニヤ

時事新報 三月十日

雜報之内

○佛國ノ東京政略 佛國カ清國トノ談判ハ和戰何レトモ
 決セサル模様ニシテ向後ノ實跡如何ハ佛國ノ當局者ニ於テ以テ
 尚一定ノ見アフルガ如クナルモ其東京政略ノ一時ニ至リテハ益々
 果斷主義ヲ実行シ居ル者ト思ハル近頃聞ク所ニ依レハ佛國
 ノ内閣議長フエリー氏ハ内閣諸卿ト協議ノ上ニテ嚴命ヲ東
 京治安使ハーマン氏ニ傳ヘ十月廿二日ハ議院ノ集會ヲ開ク
 ニ由リ其前ニ黒旗兵ヲ撃破シテ以テ佛國政府ハ東京安
 南ノ管理權ヲ維續スルニ怠ラズシテ其進歩頗ル満足ナリト
 報告ヲ議院ニシテ度ガ故ニ勉メテ黒旗兵ヲ攻撃スベシト命

シタリ又近來ノ風説ニ東京治安使ハ黒旗兵ト媾和ノ談判ヲ調ヘタリ杯トアリタレハ佛國政府ハ未ダ斯ル報告ノナキノミナラズ佛國ヨリハ更ニ武断政略ヲ執ルノ命ヲ傳ヘ佛軍ガ山西北竄ヲ攻取ラザルノ間ハ決シテ和ヲ容ズトノ決定ナレバ佛國ハ自今東京ニ對シテ更ニ一步ヲ引クコト有間敷ト云ヘリ

東京日々新聞 十二月十日

雜報之内

○法軍北寧ヲ陷ル 法軍カ技ント欲シテ技ク能ハズ既前ノ征東都督ブーエー將軍モヒラ技ケラレタル北寧府モ終ニ法軍一挙之ヲ陷レタリト云フ係ニ當時法軍ノ死傷ハ最も多カリシ由去十一月廿七日上海ナル或ル西人ノ許ヘ電報アリタリト云フ尤モ其真偽ハ後報ヲ待ツニアラザレバ驟カニ保シ難シ又聞ク清國商船ニテ洋面ニ往來スルモノ本國ノ旗幟ヲ用フルニ便ナラザレバ當分他國ノ旗幟ヲ假用セントスル由右ニ項上海申報ニ見ヘタリ

東京日々新聞 一月十日

外國電報

○十二月九日倫敦發 曾公使ト佛國相國兼外務卿ノ間ニ
談判尚ホ繼續セリ○インドニ會議ニテ同植民地ノ普通
事務ヲ議センメンガ為メニ聯合會議ヲ組織スベキニ決議
セリ (メイル新聞)

○上海通信 此報ハ本月十日上海發ノ報ナルガ頗ル目下
ノ問題ニ關係アレバ掲載ノ順次ヲ追ハズ特ニ茲ニ載テ
讀者ノ覽ニ供ス

先信安南事件日々迫ルヲ以テ清國ニ於テ已ニ其豫防ヲ十分ニ

加各督撫密諭臨時防務今ヨリ之ヲ講セシメ又各國
駐北京公使ニモ總理衙門ヨリ照會セシ趣ヲ報シタリシガ
今此照會文ヲ改字ヨリ譯セシモノヲ得テ之ヲ見ルニ

越南之為中國藩服業已二百餘年該國王為中國所冊
封越南亦時有使臣來京入貢我國自同治至今時有
匪人擾亂該國之北寧及鄰近各地越南屢求中國出兵
剿匪我朝俯允所請特派重兵出界剿滅賊黨前後
十年中所費帑項不止一千萬兩惟念越南為中朝藩服我
朝分應保護即使衰微不至亦固其所此時法國欲取南
定河內北寧等省復欲與中國開戰中國以保存各國貿易

為心不欲以此小事致啓釁端而碍商局然法人似狀
逞強不顧情理我朝何以堪之溯查我皇上登極之時
越南全國人民盡服舊君之服而法人與越南私立和約
約內并不聲明越南為中國之藩服法人故今得藉口以越
南不歸中屬特是非豈無人知中國甚願永享昇平法人
若與我仍念舊好事當可以通融辦理豈法國不以中國為
分所應為竟攻華兵所駐之北寧則法自絕我好中國惟有
用兵毫無疑義為此照會貴公使查照希即示知各貴
國人民可也此請日祉

此照會ハ本ヨリ佛國ニ駐在ノ曾公使ニモ訓示アリタル可ケレバ
同氏ガ談判ニモ定メシ十分ニ之ヲ述ラセタルベキニ安南ニ在ル

佛軍ニ更ニ其辺ヲ顧ミルナク其意恰モ安南ヲ得ルモ黒旗ニ
シテ嶋ヲ負ヒ居ランニハ清國トノ關係ハ断スルナク速カニ此黒
旗ヲ薙滅セザレバ全切ヲ奏スモノニアラズトヤ思ヒケン其後ハ阿
非利加ノ新兵モ到着シタレバ頻リニ兵備ヲ加ヘ北寧ニ進逼
セシメ現ニ此數日間ノ傳聞ニテハ去月廿日ニ佛軍ニ隊河内
ヨリ進發ラケシ北寧ニ向ヒタリ其後廿七日ノ夜ノ電信ニハ
此一旗ノ佛軍ハ遂ニ苦戦シテ北寧ヲ破リ之ニ據レルカ佛
軍ノ死傷モ殊ニ少ナカラズトノ由ヲ達シ来レリト申傳ヘ又
此戦ニ應援セシ者ニヤ海東地方ニ清兵一千五百名計モ進
攻シ同所ニ駐在ノ佛兵ハ僅カニ百八十名ニ過ギザレハ殆ンド之ヲ
支フルト能ハカリシニ辛ニ一艘ノ軍艦来リ合セ共ニ防戦シテ漸

ク之ヲ却ケ清兵ノ死傷ハ相應ニ多カリシナド、申傳ヘ一
時ハ當地ノ噂ニ已ニ兩國ノ交ハ最早断キタリト種々ノ説ヲ
起シ大ニ人氣立タレドモ或ル新聞ニテ深ク其説ノ據ルニ足ラザ
ル旨ヲノベ未ダ北寧ノ戦ニ付テノ電信ハ到ラサル旨ヲ公衆ニ示
シタリシヨリ此昨今日ハ種々浮説モ収リタルガ總体北寧ニ
佛軍カ逼ルヨリ曾公使ニハ已ニ佛國ニ於テ若シ擬約ノ如ク兵ヲ
同地方ヨリ引揚ケザルニハ清國ニハ断シテ平和ノ談ヲナサザルベシ
ト申張ラル、一數回ニ及ブモ更ニ其要領ヲ得ザルノミカ更ニ兵
ヲ調シ陸續進行ヲナサシメ其數ハ六千名ヲ佛國ヨリ出シ此
迄ノ四千ノ兵ニ合セ一萬ノ兵ヲ安南ニ駐シ順次ニ其志ヲ遂
ゲントスルノ勢タレバ已ニ一度ハ曾公使ニモ烈シク申出シ亦和

議ヲ談セズトアリタリシ其面色ノ常ニ変ニタルヲ以テ佛官ニ
ハ温慰ヲ尽シ又其決議ヲ遲延セシメタリシトノ電信アリシガ
曾公使ノ此舉動ト佛國ノ一日遁レシ其議ヲ緩ニシ其間ニ
兵ヲ添ヘ黑旗ヲ除キ清國ノ邊界ニ臨ミントスルノ舉動ヲ熟視
スルニ双方相下ラス共ニ虎ニ騎ルノ勢ナレバ孰レカ先キニ下ルモハ
強者ノ食ヲ充タルヲ以テ曾公使ニモ身ヲ顧ミテ十分ニ之ヲ
主持セラルベク旁々昨今ノ兩國安南ノ形情ハ實ニ累卵ヨリ
尤モ危険ヲ感ゼシメタリ

○密諭 左ノ一項ハ清帝ノ密諭ナリトテ滬報ニ載スル所ナレバ
茲ニ抄録シテ讀者ニ示ス

光緒九年九月三十日奉 上諭、法人既与越南立約、必将用

兵北圻、滇粵門戶豈可任令侵逼、現經總理各國事務
衙門、照會法使告以越南久列藩封、歷經中國用兵剿匪、
力為保護、為天下各國所共知、今乃偏陵無已、豈能受此
蔑視、倘竟侵及我軍駐紮之地、惟有開仗、不能坐視等語、
如此後法國仍欲逞兵於北圻、則我之用兵、固屬名正言順、
着直隸兩江兩廣雲貴各督部、一體籌備、如果法人前來
攻逼北圻、即行督飭、官共竭力捍禦、毋稍鬆動、此舉係
專為法人侵我藩屬、逼近邊界、不得不力籌抵禦、至內地
各國通商地方之法國商人、仍當隨時保護、欽此、

東京日々新報 十二月十三日

外國電報

○十月十九日巴理發 清佛ノ談判ハ再々開セタリ代
議士院及極左黨ノ舉動ハ清國ヲシテ其要求ヲ穩信
ナラシムルニ至ラン一ヲ期望セラル○亞非利加兵若干更ニ
東京ニ發遣セラレントス○代議士院ハ政府ヨリ申込メ
東京遠征費ヲ可決セントスルノ勢アリ現ニ其調査委員
ノ多數ハ此ヲ是認セリ

○十一月廿日巴理發 東京遠征費ハ必定可決セラルベシ○
ミツソー號ハ廿四日亞弗利加兵二大隊ヲ載セテ拔錨セントス

同雜報 同月同日

○上海ノ來翰 此頃上海ニ在留スル某氏ヨリ社友ニ許
ヘ寄セラレタル書簡ニ清佛關係ノ意見ヲ載セタリ前後
ノ事迹ニ照ラシテ或ハ其要ヲ得タルモノ有ルカトモ思ハルレハ茲
ニ掲録シテ看者ニ示ス其書ニ曰ク此迄清國ノ他國ノ逼
凌ヲ蒙リタルモ數回ノ一ナルガ倒底双方邊僻寸壤ノ争ヒ
ニテ總体ノ大局ヲ顧リミル時ハ双方トモ和議ノ二字ニ其
要點ヲ定メ談判ヲナス事ユヘ一時ハ餘程激烈ノ懸合ニ
至ル如クナレトモ結局ハ償金ノ多寡ニテ其争ヒヲ收メ
悉皆一轍ニ出ルガ如シ彼ノ俄國伊犁ノ事件ノ如キモ清
國ニテ從前ノ版圖ヲ削タスル數千里ノ多キニ及ブラテ
一時ハ其全權公使崇厚ヲ斬監侯ノ重罪ニ處シ結約ノ

失錯ヲ咎メ併セテ老将鮑超ニ數千里ノ遠キヲ顧リミズ
湖南ヨリ數万ノ兵ヲ運ビ山海関ヲ防守セシメタルモ全タク
北京政府ノ策略ニテ斯ク見セカケ先ツ敵ニ必戦ヲ示シテ
然ル後賠償ノ談ニ徐々ト落着セシメント欲スル者ナリト事
後日ニコソ知レ渡リタレ一時ハ内外ノ外國人ハスハ俄清ノ事
破レタリト驚カガレモノハ無リシ程ナリ此事余ハ此國ノ某老
学ニ聞キ得タレバ自後眼ヲ清英外交ノ措置ニ注クニ実ニ
火ヲ睹ルガ如キモノアリサレバ清國モ余カ本國(日本)ニ在リシ旨
伺察セン如ク迂漫魯鈍ニ今日ヲ送ルモノニ非ス中々外交上ニハ
如大ナク心ヲ配リ居ル事ト存ゼラレサレバ今般ノ安南事件ニモ
又前策ヲ用ヒントシ既ニ李中堂カ前月上海ニ駐轅中彼ノト

リクロー公使ト談判ノ節徐ヨリ急ニ至リ急ヨリ激ヲ加ヘ終
ニ其局ヲ結ハントシタルニ佛政府ニハ更ニ安南ニ於テノ舉動ヲ
変ゼズ李氏モ今度ハ此舊策ヲ襲用シ能ハズト見据ラレ
シヤ急ニ身ヲ局外ニ脱シ天津ノ本棧ニ楯籠リ毫モ消息
ヲ通セザレハトリクロー氏モ少シク其機ヲ攷シタルガ騎虎ノ勢ヒ
今更手ヲ下ル事モ成難ク我國ハ清國ニ関係ナク十分安南
ヲ處分スヘント云ヒ張リテ平氣ニ北京ニ到ラレシガ此所ニモ
究リ相手取ル者モナク何ヤラ手持無沙汰ノ様トナレリ此際
ノ光景ハ清佛双方トモ見込外レト申スヨリ外ノ評ナシ然ルニ茲
ニ清國ニ取りテ不意ノ天福ノ降り来リレトモ云ヘキハ安南出
征ノ佛軍中ニテ文官武將ノ間ニ紛議ノ起リタル一時ニテ清國ノ

老将達ハ此事ヲ傳ヘ聞クヤ好譽乗ゼザルガラストテ忽チ
面目ヲ一変シ千里兵ヲ出シテ雲南廣西ノ邊禦ニ次第ニ
厚キヲ加ヘタリサレバ昨今當地ニテ洋客ノ噴々スル清廷ガ黒旗
接應ノ一モ全ク無根ノ説トモ申シ難ク其等ノ故カトリクロー公使ハ
身ヲ局外ニ避ケ別人ニ都合能ク其談ヲ結ハシメント出懸ラ
レシニモアラサルヤ尤モ清國ニモ北部ニ李アリ南部ニ左アリ殊ニ
其争地モ伊犁ノ邊壤トハ違ヒ佛兵ノ黒旗ヲ壓センニ六十八
省中直接ニ其餘害ヲ蒙フル所少キニ非レバ自然佛兵ニシテ
北圻ニ逼ル勢ヒアラバ縦ヒ戦争ト迄ハ参ラズトモ撲リ合グラ
イノ騷キニ相成ベクト考ヘラル又新來ノ英公使パークス氏ハ豫テ
御承知ノ如ク清國ニハ有名ナル宿怨ヲ取り居ラル、人ナルト以

節ウエード公使ニ代ラタルハ英政府モ氏ガ幹達ノ方ヲ奉ゲ
前公使ガ支那風ニ泥ミテ不活潑ナル舉動ニ附マレ安南ノ
處分ヲ獨リ佛國ニ擅イマニ為サレムル而已ナラズ清國ニ占メタル
英國ノ利ヲモ併セテ削奪セラレントスルヲ防衛スルノ策ナルベキカ
若シ然ランニハパークス氏ニハ前年怨ミヲ取りタル清人ノ意外ニ
出テ恩威兩用都テ清人ノ望ミヲ収ムルノ事業モアルベクヤムト
見エタリ

同外信 十一月十三日

○東京理事員長 東京理事員長ハルマン氏ハ此程其
職ヲ免ゼラレタリト聞ク又同氏ノ帰省願ハ許可セラズトモ聞ク
如何ナル譯合ノアル事カ分ラズ

○清國政府ノ答書 トリクイ公使ヨリ掛合ノ儀ニ付清國政府ハ
フエルリー卿ヘ宛テ、答書ヲ送りタリト云ヘリ如何ナル趣旨ナル
ニヤ

○曾公使巴里ニ歸ルノ主旨 先ニ曾公使カ英國ヲ去テ巴理ニ
歸ラレタルハフエリー氏ガ新タニ外務卿ノ職ヲ執ラル、事ト成
リタルニ付テ此ヲ賀スル為メニテ清國政府ヨリ別ニ命令ノ到
達シタルガ為メニハアラズト云フ説アリ

東京日々新聞 十二月十四日

○上海通信 (前號ノ續) 右ノ通告事日々ニ相迫マルヲ以

テ已ニ先信ニ寸認メタル彭玉麟氏モ廣東ニ臨マレ其統帶
ノ兵ハ海路ヨリ同省ヘ至急差送ラル、事トナリ去日來
四艘ノ輪船ニテ漢江ヨリ當上海ニ來リ夫ヨリ艦ヲ替ヘ同
省ニ向フ筈ナレバ其兵士等ハ當港ニ二日滞在ラナシ居
リシニ街路ハ殆ンド踵ヲ接スル位ニ遊行シ居リシヲ見受
ケタルニ孰レモ湖南精選ノ壯兵ニテ尽ク三十以下ノモノナルガ
別シテ有名ナル紀律嚴明ノ彭氏ガ部下ニ隸セン丈ケアリ
テ其拳動モ疎暴ナク色々買物等ヲナスヲ見ルニ尽ク強
買等ノ情事ヲ見ズ實ニ一戰ニ足ルベキモノト存セリ彭氏
ニモ此節ノ出張ハ自己ニモ意ヲ決シ防所ニ赴ケタルモノト
見エ其臨行ノ奏疏中ニ「此時佛國ニハ越南ヲ以テ中朝ノ

藩服ト認メザルハ實ニ坐視シ難ク況ンヤ本朝ノ積弱已ニ
久シク屢々他人ニ輕視セラル已ニ多年タリ老臣宿將敵愾
同仇正ニ士卒命ヲ用フルノ秋ニ當リ未ダ初メヨリ順次ニ奉
動ス可カラズンバアラズ云々」トアリタル由ニテ夫ガ為メ北京ノ
人氣モ引立テ居レリト承ハル又同氏ニハ六百里加緊ノ使ヲ
馳セ廣東ヨリ南京ニ軍費差當リ水師ノ用ニ供ヘアル分ヨリ
至急四万兩ヲ差送り兵度旨ヲ申越サレタリトノ事ナルガ同
氏ハ尤モ氣ノ短キ性質ノ人故江南ニアリシ時ト變リ廣東
ニ至リ定メシ彼レ是レ一日モ防備ニ怠ル可カラサルヲ目撃シ
シ斯ク兵ヲ集メ食ヲ催スルニ汲々タラシ、事ト察セラル同
省ノ張總督ニモ去月十六日ヨリ十七十八ノ三日ニ各駐防所ヲ

巡閱セラレ又同十八日寧波ニテモ浙江提督ノ改陽氏ニ六營ノ
兵ヲ校シ又南京善將軍ニモ同廿四日ニ鎮江ニ着アリ廿八日同
所駐在ノ兵營馬隊凡三百人歩隊四百人合計凡千人ノ兵
ヲ校閲セラレタルガ其練法甚不熟ニテ將軍ニ深ク悦バザル面色
ニテ半途ニシテ令ヲ傳ヘ之ヲ止メ轅ヲ回ラレシ由各所トモ夫々
防備ニ着手ヲナシ居ル事ト存ス又德國ニ清國ヨリ注文セ
セン鐵艦ハ昨今ノ外來信ニハ清國委員李相楨ナル人其廠中
ニ詰メ切リ預リニ趕造ヲ催シ同國駐在ノ李公使ニモ時々
之ニ臨マレ己ニ鐵甲船并ニ水雷船等ハ下水ヲ為シ猶一艦ノ
鐵艦モ不日ニ下水ノ都合ニ至リ其清國ニ回到スルハ今年内
ニアルヤ又ハ來春ノ事ヤ其辺ハ未ダ決セザリシト聞ク斯ク如

ク清國ニ於テモ夫々防備ニ手ヲ尽スニ彼ノ前月安南ヨリ天
津ニ赴キタル阮巖ノ兩使ニハ此節歸國ヲ為スベシト數日前保
大號ニテ當地ニ着セリ全ク要領ヲ得ズ瓢々然ト南歸ヲナスモノ
ニヤ又ハ清國ニモ隨分ト下氣張り同國ノ關係ニカヲ用フルコトヲ
厭カニ見認メタリシヨリ一日モ早く其國ニ通セント企テタルモノニヤ

同外國電報 三月十四日

○十二月十日倫敦發 佛國ノ代議士院ニテハ著キ多數ヲ以
現内閣ニ信用ヲ置ク旨ヲ議決シタリ○フエルリー卿ハ北
寧攻戰中止ノ要求ニ約束上ニ基キタル判然タル根據ナ
キニ於テハ其攻戰ヲ中止スルコト能ハズト公言セラレタリ

同雜報 同月同日

○清廷ノ布告 香港日々新聞ニ清帝ヨリ清佛ノ間
若シ戦端ヲ用クニ至ラハ佛國人ノミハ残ラズ香港ヲ立退ス
ベシ其他ノ諸外國人ハ生命財産共最モ懇ロニ此ヲ保護シ
戦争ノ始ル迄ハ平常ノ通り各自ノ業務ヲ營マシムベシト
ノ勅命ヲ香港府ニ降サレタリトアリ

東京日々新聞 二月廿四日

外國電報

○同月廿日同所發 佛軍ハ山西ヲ陷レタリ 夥シキ死傷アリ

○同月十九日倫敦發 汽船ハンコー號ハ香港鎮臺ノ援兵
トシテ英兵九百名ヲ載セラ同地ヘ向ケ投錨シタリ

同雜報

○上海通信 清帝ノ敕諭 此ニ項ハ本月十六日上海特派
通信者ヨリ報シ越シタルモノニシテ目下急要ノ報ナ
レハ特ニ茲ニ掲載ス讀者乞フ外報欄内彭玉麟ノ奏
議ト并セ見ルベシ

安南一件ニ付清ノ關係ハ日ニ危急ヲ加ヘ今日ニモ双方ノ

決裂ヲ来スベキ有様ニラ當地ハ稍々北京ニ位セシ清國ノ
地ナレバ猶ホ近況ノ電音ヲ得ルニ餘暇アレドモ廣東ハ安
南ト海ヲ隔テ相望ムノ地ナレハ官民ヲ問ハズ人氣ハ大ニ
振ヒ今日ニモ號砲次第ニ各人奮勇シテ營ニ投シ共ニ
此仇ヲ懲ヤントスルノ勢ニテ最早南部ニ往來ヲナス清商
ノ設立セシ招商局ノ輪船中國南號ハ英國ノ旗ニ取替ヘ
懷遠號モ其子數ヲナン居ルトノ事ナレバ當地ノ人氣ニ比ス
レバ一層激烈ニ及ヒ居ルト察スルガ其根基ノ地タル安南地
方ニ於テノ戦信ハ其後更ニ之ヲ詳聞スルコトヲ得ズ先信海
東地方ニ於テ清兵ノ黒旗ト入り交リ佛營ヲ襲ヒタル旨ヲ
報シタリシガ此説ハ全ク実事ニテ今ニ双方相持シ日々小戦

ヲ用キ居ルヨシ其後ノ傳聞ナルガ此傳聞ヲ當地ニ送り來リ
タル後ハ同地モ頗ル時日ヲ費シ居レバ孰レノ方ヨリカ大ニ進
撃ヲ試ミシ事アリシヤモ難計佛兵ハ此戦ノ前ニ清兵ガ
哨兵線トナス北寧ニ一砲ノ銃ヲ放タバ即時ニ兩國用戦ト
申流シタル北寧ヲ視察セント已ニ兵勇糧仗ヲ船ニテ送り
其様子ヲ伺ハントセシ中海東ノ役ニテ其望ヲ達セザリシガ佛軍ハ
必ス其辺ニ全軍ノ鋒ヲ向シテヲ希フ事ナレハ最早時日モ過
キ居ルコトナレバ或ハ已ニ開戦ニ及ヒ居ル事ニヤモ難計カ近日ノ説
ニテハ佛兵ハ北寧ニ向ハズ其後ハ頗リニ桑台地方ニ向ヒタ
リトノ事迄ニテ未ダ開戦ニ及ビ居ルコトヤ否ヲ傳聞セズ此北寧
ニ桑台ノ兩處ニハ已ニ清兵ノ到着セシコトハ二万六千人ノ多キニ

至り其中九千人ノ兵ハ昨今ニ調到セシ者ノ由ナリト聞ケバ
追々清國ニモ同境界ノ守備ヲ嚴ニスル由ミテ兼テ清國ニ
於テハ次第ニ佛兵ガ雲南廣東ノ境界ニ逼近スルヲ以テ各督
撫ニ密諭ヲ下シ豫ジメ佛國ノ兵ヲ防ガシメラル、段ハ先信ニモ
度々其大意ヲ譯シ之ヲ報道シ置タリシガ今全備ナル此諭
文ヲ得レバ直ニ左ニ掲ゲ清廷ガ此節安南關係ニ付進来スル
佛兵ヲ防グ方略ノ在ル所ヲ知ラシメント其贅ヲ厭ハズ之ヲ譯スル
ニ

光緒九年九月三十日 上諭ヲ奉ス佛人已ニ越南ト約ヲ立
テ必ズ劉團ヲ驅逐スルヲ以テ名トシカヲ北圻ニ專ラニセントス
滇粵ノ門戸豈彼レニ任ジ侵逼セシムベケンヤ現ニ總理各國

事務衙門ヨリ佛使ニ照會シ告ルニ越南ノ久シク藩封ニ
列シ歷々中國ヨリ兵ヲ用ヒ匪ヲ殺シカメテ保護ヲナセシハ
天下各國ノ共ニ知ル所タルニ今乃チ侵掠シテ已ムナシ豈此
蔑視ヲ受ンヤ倘シ竟ニ侵シテ我軍駐紮ノ地ニ及バンニハ
唯々用仗アルノミニテ坐視スル能ハサル等ノ語ヲ以シタレバ
如シ此後佛人仍ホ兵ヲ北圻ニ遣フセン一ヲ欲スレバ則チ
我ノ兵ヲ用フルハ同ヨリ名正シク言順ナルニ屬シ劉團ニハ
素ヨリ奮勇ト稱シ現在退テ山西ニ紮シ河内ヲ距ル一稍
遠シトセハ徐延旭ニ着シテ劉永福ニ教令シ軍ヲ整ヘ進紮シ
機ヲ相テ河内省城ヲ現復セシメ稍々退阻アルベカラズ又北寧
ハ吾勇駐紮ノ所タレバ若シ佛人ノ前來シテ攻逼センハ即時官

軍ニ督師シカラ竭シ捍禦ヲナシ稍々鬆動アルトナケレ前ニ
左宗棠ノ奏擬ニ據ルニ王德榜ニ勅シ廣勇數營ヲ調募シ
テ滇粵ノ辺界ニ駐紮セシメ並ニ廣東ニアリテ捐輸籌餉
セン等ノ語アリ當時已ニ諭シテ諭旨ヲ聽從シ遵行ラナ
サシメタリ現在廣西ノ辺防緊要ニテ誠ニ恐ル兵カノ尚ホ
單ナルトヲ聞ク王德榜ニ現ニ永州ニ在リテ已ニ營勇ヲ
招募シ調ヲ馳キ居レリト尙シ已ニ軍ヲ成セシ事ナレバ
左宗棠ニ着シ即時該藩司ニ敕シ迅速ニ廣西ノ辺外帶赴
シ扼紮シ徐延旭ノ節制ニ歸セシメ需ムル所ノ餉項ハ若シ廣
東ノ捐需ヲ待テハ緩ニシテ急ヲ濟ケガレニヨリ左宗棠ニ着シ
預シメ籌定ヲナシ仍ホ江南ニヨリ竭カシテ籌撥ヲ行ニ缺

乏ナカラシムベシ岑毓英等前キニ奏ス滇軍ハ山西ニ駐紮シ
居ルニ輪船ノ礮彈ハ城中ニ及ブケレバ防守ハ易カラント惟ニ
該城ハ北寧ト相距ルト較々近ケレバ必ス當サニ固守シテ以テ
特角ノ勢ヲ成サシムベシ唐炯現ニ防所ニ駐シ自ラ時ニ隨
ヒ機ヲ相テ調度ヲ為スベキニ乃チ該撫ニハ並ニ未ダ諭旨ヲ奉
有セズ卒ニ回省ヲ行ヒ辺防鬆懈ヲ致ス其咎ハ實ニ難
シ若シ頂戴ヲ摘去シ革職留任トナシ以テ後效ヲ見ル如シ
再ビ退縮シテ前マガルニハ定メテ重キニ從ヒ罪ヲ治スベシ滇省
ノ防營ハ多キトナケレバ策應ニ支シ難キヲ岑毓英唐炯ニ
着シ數營ヲ添募シ以テ兵カヲ厚ナラシムベシ此舉ハ專ラ
佛人我ガ藩屬ヲ侵シ辺疆ニ逼近スルモノニ係レバカメテ防禦

ヲ籌キルヲ得ザルモ内地各國通商地方及ヒ佛ノ商人ニ至リ
テハ仍ホ隨時ニ保護ヲ加ヘ別ニ口実ヲ滋カラスメンコトヲ免シ
尙シ佛人竟ニ兵船ヲ以テ華ニ來リ衅ヲ尋ニハ必ズ當サニ
先ヅ自カス戒備ヲナスベシ李鴻章左宗棠張樹聲倪文蔚
裕寬ニ着シ迅カニ布置ヲ籌シ視テ緩國トナスベカラズ
テ天津ハ京師ニ密近シ關係尤モ重ク李鴻章ハ海防ヲ
籌辦セシ一已ニ年アリ朝廷ノ倚ル所タリ天下ノ責ル所タリ
尤モ當サニ勉カシテ國維ヲ為シ意ニ諉卸ラ存スルコトヲ得ズ
此ヲ將テ六百里ニ由リ各々密諭シテ之ヲ知ラシム欽此